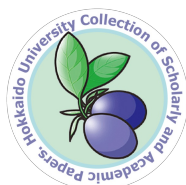




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソルジェニーツィン『煉獄のなかで』における声：言語秩序と「身体」をめぐる
Author(s)	平松，潤奈
Citation	スラヴ研究, 51, 321-353
Issue Date	2004
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39056
Type	departmental bulletin paper
File Information	51-011.pdf



ソルジェニーツィン 『煉獄のなかで』における声 —言語秩序と「身体」をめぐる—

平 松 潤 奈

序論

ペレストロイカ期以降のソ連文化論は、その「文学（言語）中心主義」を批判の対象の一つとしてきた。ソ連では美術や映画などにおける表象が、社会主義リアリズム文学をモデルとする規範的言語に徹底して従属させられた、というのがその趣旨である。例えばミハイル・ヤンポリスキーによれば、「わが国の映画製作者が伝統的に心を砕いているのは、登場人物の心理、社会的葛藤、ストーリー展開などの問題、つまりほとんど全面的に映画の文学的基盤に属する問題なのである」^①。ミハイル・ルイクリンによると、スターリン期からソ連末期にいたるまでの視覚文化は、「視覚言語」に支配されてきた。そこでの視覚は「個体化のフィルターを通過せず」、集团的に同一化した身体を表象する規範の内部で、権力による交換・調整が可能な言語秩序に完全に覆われており、「何ものもその個別性において見ることをせず、具体的な身体的発現の還元不能性に注意を向けない」^②。

ルイクリンは、具体的・個別的な視覚としての身体を「視覚言語」と対立させるが、身体は視覚性のみで還元されるわけではない。ヤンポリスキーは上述の論文で、あるソ連映画が、観客の無意識下に作用すべき「蚊の羽音」を「飛行機の轟音のごとく」響かせていたとして、「言語化されていないものが効果をもつことを、芸術家が信じていない」と嘆いている^③。問題は、言語秩序と、その外部に位置づけられる身体（また身体的知覚）との対立なのである^④。

1 Ямпольский М. Кино без кино // Искусство кино. 1988. №6. С. 89.

2 ミハイル・ルイクリン著、番場俊訳「言語文化における意識」『ミハイル・パフチンの時空』せりか書房、1997年、207頁。

3 Ямпольский. Кино без кино. С. 91.

4 「文学（言語）中心主義」批判と、「身体」への関心が高まったソ連邦崩壊前後のロシア思想の状況については、桑野隆「『余白の哲学』のマイクロポリティクス」『現代ロシア文化』国書刊行会、2000年、107-133頁。近年出版された社会主義リアリズム論集 Гюнтер Х. и Добренко Е. (ред.) Соцреалистический канон. СПб., 2000 においても、スターリン期の諸芸術が言語的要素へと切り詰められていたという見解が頻繁に登場する。絵画・彫刻の分野では、文学（叙事的な言語）が作品のコンテクストを決め、造形芸術は文学を図解するものになったという指摘 Голомисток И. Соцреализм и изобразительное искусство. С. 138、映画においては、叙述性や台詞等の言語的要素が優勢を占めたという議論 Булгакова О. Советское кино в поисках «общей модели». С. 150, 162、社会主義リアリズムの音楽における、ナラティヴ性や綱領性（音楽作品の前提となるべき言語テキストがあること）の重視を指摘した論 Розинер Ф. Соцреализм в советской музыке. С. 177 等を参照。また文学テキストに関しても、論理的な言語の操作により、非論理的な身体表象が著しく制限されたことが指摘されている。生理的な欠陥は克服されたものとして描かれる Смирнов И. Соцреализм. Антропологическое измерение. С. 18、あるいは、苦痛の痕跡をとどめうる人間の身体が抹消されている Рыклин М. Немец на заказ. Образ фашиста в соцреализме. С. 824 といった読解を参照。

こうした議論において、言語秩序という言葉は、社会秩序と類比的に用いられている。ソ連では、論理的で体系だった言語によって社会活動の様々な局面が統制されていたと考えられるからだ。以下本稿でも、言語秩序という言葉はそうした広い意味で使っていくことにする。そして、その言語秩序に対立するものとして想定される概念としての身体を「身体」と表記し、こちらも通常意味される即物的な身体よりも広義のものとして使うことにしたい。

この「身体」をめぐる問題がスターリン文化論のなかで重要性をもち始めたのは当然、「身体」が、支配的な社会秩序あるいは言語秩序におさまりきらないものとして、それらに対する過剰や逸脱として、さらにはそれらに敵対するものとして捉えられうるからだ。それゆえ「身体」は、体制側からは秩序に服すべきものとみなされ、テロルの対象として物理的暴力により捕獲され隠蔽されるものになると同時に、反体制的な表象行為や、ソ連文化についての反省的な言説の対象ともなる。そうした「身体」がとりわけ想定されやすいのは、強制収容所を論じるときであろう。収容所では、文字通り人間の身体が隔離され抑圧されているからだ。

本稿は、「収容所文学」の代表的作家であるソルジェニーツィンの著作も、そうした抑圧される「身体」の問題を扱ってきたという考えから出発する。当然ながら、ソルジェニーツィンの著作はこれまでも確かに、収容所の非人道性や身体暴力を告発するものとして読まれ論じられてきた。だがそれらの議論は政治体制批判と直結していることが多く、テキストのなかで「身体」がどのように語られているかという問題に踏み込み、それを詳細に検討するものではなかったように思われる。

既存のソルジェニーツィン論は、「思想的」観点からのものと、テキスト分析の二つに大きく分けられる。前者の大半を占めるのが、テキストの細部を読むのではなく、作家の政治的・道徳的・宗教的な姿勢のみを作品から抽出しようとするものである⁵⁾。そこでは、収容所のような過酷な環境で人間はいかに生きるべきか、あるいは、西側の物質主義社会やソ連の全体主義社会を乗り越えていかに人間の尊厳を重んじる社会を築くか、といった抽象的・教訓的な「精神性」の問題にテキストが還元されていく。一方、ソルジェニーツィン自身が頻繁にそうした「精神」論を開陳しており、この種の論が主流となりやすいだけに、逆に作品を「文学的」に考察しようとする傾向も強い。語りや語彙の研究、作家と他の文学潮流との影響関係などを見ていくものである⁶⁾。

だが問題は、前者が「文学」を扱わず、後者が作品を作家の政治性などの問題から切り離して純粋に「文学的」な側面だけを扱っているということではない。興味深いことに、両者は、互いの存在を無視しているというよりもむしろ、積極的に結びつけられていることが多い⁷⁾。問題なのは、「文学的」側面が安易に「思想的」な問題（狭義の政治性）に還元されること

5 James F. Pontuso, *Solzhenitsyn's Political Thought* (London: UP of Virginia, 1990); Stephen Carter, *The Politics of Solzhenitsyn* (London: Macmillan, 1977).

6 Vera Karpovich, "Lexical Peculiarities of Solzhenitsyn's Language," in John B. Dunlop, Richard Haugh and Alexis Klimoff, eds., *Aleksandr Solzhenitsyn: Critical Essays and Documentary Materials* (N.Y.: Collier Books, 1975), pp. 188-194; Kathryn B. Feuer, "Solzhenitsyn and the Legacy of Tolstoy," in Dunlop, Haugh and Klimoff, eds., *Aleksandr Solzhenitsyn*, pp. 129-146; James M. Curtis, *Solzhenitsyn's Traditional Imagination* (Athens: U of Georgia P, 1984).

7 例えば Vladislav Krasnov, *Solzhenitsyn and Dostoevsky: A Study in the Polyphonic Novel* (Athens: U of Georgia P, 1980) は、小説の構造やシンボル等を解明しながら登場人物を典型化し、それぞれを狭義のイデオロギー・理念（共産主義、ニーチェの超人思想、エピクロス主義、キリスト教等）の代表者とする。

で、テキストに現れる社会的問題の具体的諸相が論じられにくくなっている点である。『収容所群島』を読めばわかるように、そこで語られる収容所問題は、既存の特定の政治思想に還元されるものとして以上に、被収容者の身体を管理する様々な規律や技術の細部の集積として捉えられている。そしてそれらの細部は、単なる状況の記述ではなく、身体に関する一定の問題意識から語られているように思われる。

本稿は、「思想」と「文学」を単純に結びつけたりどちらかに組みしたりせず、「身体」と言語の問題やメディア論的視点を通じて、ソルジェニーツィンのテキストが潜在的にもつ論点を新たに提示する試みである。程度の差こそあれ、「文学」は既存の「思想」を直接反映するものでもないし、両者は互いに無関係でもない。まずは作品を文学テキストとして読み、その「文学的」細部がいかなる社会的問題として読まれうるのかを見ていきたい。そうした細部にこそ、収容所やソ連社会における「身体」の問題が固有の形で現れると思われるからだ。作家の「思想的」側面は、そのような問題が発生する具体的状況を通して意義づけられるべきであろう。

この具体的状況を見ていくにあたり、本稿は、ソルジェニーツィンの長篇小説『煉獄のなかで』⁸⁾のテキストを取りあげる。このテキストは、ソルジェニーツィンの著作のなかでも「身体」の問題をとりわけ緻密に扱ったものだと思われるが、そこでの「身体」とは主に、通常の意味での人間の統一的な身体ではなく、声という、身体から発生しながらも身体から乖離し、言語として扱われる「準-身体」とでも呼ぶべき現象である。声を「身体」と捉える点については後述することにし、ここでは『煉獄のなかで』の物語の流れを確認しながら、この声を本稿が具体的にどう扱うのかを示しておきたい。

物語では、1949年12月24日から27日までというわずかな数日の出来事が、二つの筋に沿って展開される。一方には、外務省官僚インノケンティ・ヴォロディンが国家機密を漏洩し逮捕されるまでの探偵小説風プロットがある。ヴォロディンは、ソ連のスパイがアメリカで原子爆弾の製造技術に関する情報を受け取ろうとしていることを知り、アメリカ大使館に警告の電話をかけるが⁹⁾、この電話を盗聴した国家保安省は、電話主をつきとめるため、スターリン専用の盗聴防止電話装置を開発している特殊収容所に音声分析を命じる。もう一方では、その音声分析を託された特殊収容所の囚人技術者たちの生活が群像劇風に語られる。そのなかで彼らは、支配体制とどう関わるべきか技術者のモラルの問題に悩み、それぞれ人生

Нива Ж. Солженицын. Маркиш С. (пер.) М., 1992 は、個々の具体的な語りに着目しているが、それらを性急に「精神論」と結びつけており、一貫した論点を示していない。他にも、Edward E. Ericson, Jr., *Solzhenitsyn: The Moral Vision* (Michigan: William B. Eerdmans publishing Co., 1980); Чалмаев В. Александр Солженицын. М., 1994 等が、強調点の違いはあるものの同様の論じかたをしている。

8 この小説は1958年に一度完成したが、64年に出版のチャンスが訪れた際、検閲を通すためにソルジェニーツィン自らが多くの箇所を手を入れ、96章あったものを87章に縮めた。しかしこれもソ連での正式な発表はかなわず、国外出版された。木村浩・松永緑彌訳の日本語版は、この87章版からの翻訳となる。本稿では、1978年にパリで公刊され、ロシアでは90年に初めて出版された96章版を主に使用するが、87章版との異同についても適宜指摘する。

9 収容中のソルジェニーツィンが実際に関わった事件に基づくこのエピソードは、核開発を急ぐ冷戦期ソ連の実状にあまりに肉薄しており、国益を損なう内容により検閲を通らないという作者の判断から、87章版では次のように大きく変えられた。ヴォロディンが世話になった医者がフランスの研究者に新薬を渡そうとしているのだが、それが実行され当局に摘発される前に、ヴォロディンは医者に電話をかけ警告しようとする。

の岐路に直面して大きな選択をしていく。

ヴォロディンのかけた密告の電話は、この物語全体の起点となる。彼の声が、収容所内外の様々な場を繋ぎあわせていくのだ。『煉獄のなかで』を詳細に論じたウラジスラフ・クラスノフは、このプロットを、「ドストエフスキーがポリフォニー小説でやるように、「犯罪者」の精神的冒険を見せたり […] 彼〔ヴォロディン〕の「犯罪」に他人を応答させる」⁽¹⁰⁾ものだとし、収容所は登場人物の多様な「声」が衝突する場だと述べている。

だが、『煉獄のなかで』を従来のソルジェニーツィン論と異なる視点で読むためには、この「応答」や「声」という言葉に留保をつける必要がある。クラスノフは、ソルジェニーツィンの小説をドストエフスキーの小説と並べて論じ、ミハイル・バフチンのテクストの用語である「応答」や「対話」「声」を使っている。これは、『ポリフォニー小説』という文学形式に最も興味がある」というソルジェニーツィン自身の言葉を受けたものだ⁽¹¹⁾。しかしそこで意図される「声」とは、登場人物や作者がテクスト上で観念的にやりとりする言葉や思想の比喩なのであり（その場合、この作品は思想小説とみなされている）、電話回線を経由し、録音され、音声分析にかけられてしまうような物質的な声とは異なる。そして、それが物質として伝達される声でない以上、比喩的な「声」（＝言葉）は、自己に対してであれ他者に対してであれ、すべて聞こえる声であることが前提となっている。ソルジェニーツィンはロシアの19世紀リアリズムの伝統をそのまま受け継いでいるとしばしば言われ、実際『煉獄のなかで』は、ドストエフスキーの小説のように観念的な「応答」や「精神的冒険」を繰り返す思想小説としても読まれうるだろう。だが、この小説がソ連社会や収容所における声を主題として取りあげるとき、その声は、言葉や思想を滞りなく伝えるものではない。声が言葉として受け取られるには、それ以前にまず、声が物理的に伝達され、誰かに聴き取られる必要がある。この小説は、声が届くかどうか、物理的に聞こえない可能性のある声をいかに聴取すればよいかを問い、声の物質的側面や声を伝達する技術のあり方を問題にしているのである。例えば囚人グレープ・ネルジンらが創作した小説内小説では次のように語られる。

重苦しい沈黙のなかで、囚人たちは聞いていました。ご自身の経験からおわかりのように、聴覚は、囚人にとって一番大事な感覚です。囚人の視覚は普通、壁やカバーで制限され、嗅覚はあるまじき芳香に満たされ、触覚を使おうにも新しい物が与えられません。その代わり、聴覚は異常に発達するのです。(478)⁽¹²⁾

ここでは囚人に身体性を回復させてくれるのは聴覚だけである。身体を隔離する監獄で、知覚対象を伝達するあらゆる回路が遮断されているなか、かろうじて聴覚にだけは回路が開かれているというのだ。

また小説中、ソ連官僚社会の裏の連絡網の比喩となるのは、電話である（電話に翻弄され

10 Krasnov, *Solzhenitsyn and Dostoevsky*, p. 111. 引用文中の〔 〕は平松。以下同様。

11 Солженицын А. Бодался теленок с дубом. Paris, 1975. С. 484.

12 『煉獄のなかで』からの引用は以下に基づき、頁数のみを文中に示す。Солженицын А. В круге первом // Собр. соч. Т. 2. М., 1999.

る官僚や収容所職員の様子は、繰り返しアイロニカルに描かれる(264、643-644、709))。だがそれは同時に、声の伝達を調整する現実の物理的回路なのであり、小説では、盗聴防止装置の開発や盗聴された声の音声分析が頻繁に描写される。電話がこうした具体的なメディア技術として正面から扱われているにもかかわらず、『煉獄のなかで』を論じたこれまでの研究は、それを官僚社会の悪弊を象徴する一エピソードとしかみなしていないようだ。本稿では、こうした技術描写の細部のなかに、声の伝達や聴取を脅かす回路がどのように開かれあるいは阻害されるか、という小説の中心的問題を読みとっていきたい。

先行研究に対する以上の立場を踏まえ、本論を次のような構成で進めることにする。第1章で、ソルジェニーツィンのテキストが「身体」(特に声という「身体」)をどう扱っているか、またそれを本稿がどう解釈するのかを示し、本稿の問題意識を明らかにする。第2章では、物語の中心的舞台となる特殊収容所の技術者集団が小説中でもつ意義について確認しておきたい。ソ連技術者の社会的位置づけは、小説で詳述される音声技術の話題と切り離せないものであり、本稿の問題意識にも関わる重要な背景だと思われるからだ。それは小説末尾でネルジンが行う一つの選択とも深く関連している。つづいて第3章では、本稿が小説のライトモチーフとみなす音声分析の工程を具体的に読み、その技術がソ連社会の問題とどう関係づけられていくのかを考察する。そして最後に第4章で、「身体」の問題を扱うことによってこのテキストが積極的に語ろうとしているのは何なのか、ソルジェニーツィンに対するこれまでの批判も念頭に置きつつ、ネルジン個人にとっての声と聴覚の問題、そして彼の下す決断の意味について論じたい。

1. 「身体」としての声—聴覚

1-1. 言語に対立する「身体」をめぐる

本稿冒頭で述べたように、ソ連の表象文化を扱う近年の議論は、「身体」を抑圧する「文学(言語)中心主義」を問題視するようになってきた。ソ連の社会や文化を貫いていたとされる言語とその外部との二極構造は、これから見ていくソルジェニーツィンのテキストにおいて明確かつ具体的に語られている。本稿は、この二極構造がいかにして強固たりえたかについて小説テキストを通し論じていくが、そうした主張を踏まえる際にはいくらか慎重さが必要だと思われる。

ソ連の収容所文学を論じたダリウシュ・トルチュクは、収容所の現実と言語の対立についてこう述べる。「ボリシェヴィキは、予測不可能性と不安定さの支配する現実を創出する一方で[...]その現実の言語的等価物を持ちこんだ。だがこの等価物は現実そのものとは全く異なるものだった。現実が、一貫性をもたず、予測不可能で、混沌とした危険な世界として経験されたとするならば、仮定上この同じ現実の言語的等価物とされるものは、堅固な一貫性を特徴とする、高度に組織化された調和的秩序として現れた」。こうして、論理的一貫性を保つ「文学的隠蔽」(トルチュクの著書の副題)を被った収容所は、「怪物的な現実」として扱われることになる¹³⁾。「テロルは身体しか知らないのだが、ことばのほうは逆に身体をまっ

13 Dariusz Tolczyk, *See No Evil: Literary Cover-Ups and Discoveries of the Soviet Camp Experience* (New Haven: Yale UP, 1999), p. 28.

たく知らない」¹⁴⁾というルイクリンの言葉にもうかがわれるように、言語秩序とその外部という強固な二項対立に則った議論においては、言語に還元不能な「身体」あるいは「現実」が、逆説的により実体的なものとして言語秩序の裏側に想定されていくようなのだ。しかし、このように「身体」をただ言語秩序に抑圧されたもの、言語秩序から解放されるべきものとのみ考えるならば、それは「秩序によって身体を抑圧せねばならない」といった批判されるべき主張の裏返しにすぎなくなり、検討の対象となるはずの図式を繰り返し確認するに終わってしまう危険がある¹⁵⁾。したがって、われわれがここで考えるべき「身体」とは、はじめから言語に対立している所与の実体ではない。これはもちろん、物理的暴力を被る個々の人間の身体や強制収容所の実在性を否定するということではない。「身体」が言語や秩序の外部に想定されるときに、それをあらかじめ成立済みの事実とみなすのではなく、言語秩序とのいかなる相関関係のなかで「身体」が捉えられていくのかを追うことにより、ソルジェニーツインのテキストをより精密に読むことができると思われるのだ。以下見ていくように、ソルジェニーツインにおける「身体」とは、言語秩序や記号的関係が調整される際に、その言語活動のなかで、抑圧あるいは解放されるべきものとして、言語の外部に構成されたり抹消されたりするものである。

例えば『収容所群島』で描かれるのは、「人民の敵」という社会的レッテルを貼られた囚人たちの身体が、「下水の流れ」という余剰＝廃棄物となって不可視の「下水道」脈を通じ「群島」に排出されていく状況である。そこでは、一定の（特に書類上の）秩序の整合性を保つ過程で、不条理としか言いようのない「収容所群島」のシステムが形成されていったことが語られる。ソルジェニーツインが「群島」の拡大をガン細胞の転移に喩えるのは、ゆえなきことではない。『ガン病棟』でのガン細胞は、操作可能な人間の思考や意志に逆らって現れ、医療技術によっても制御不可能なものとして増殖しつづける、不条理で不可視の「身体」である。囚人の「流れ」とそれを処理するために現れた「群島」も、システムの合理性のなかで生じる、最終的に合理化不可能な「身体」として理解されているのだ。

これらは、「身体」が社会秩序や言語秩序の外部に発見され排除されていく過程であり、秩序とその外部がいかに二極分化するかを問題としている。ソルジェニーツインのテキストは、身体と言語秩序という対立を前提にするというよりも、二項対立を成り立たせる仕組みについて語ろうとしているのである。

また、完全に収容所内部の囚人（平凡な元農民シューフ）の視点をとった『イワン・デニーソヴィチの一日』は、他の著作と比べてはるかに被収容者の「身体」に密着したテキストだとみなされるが、そこでさえ、「身体」は、単に社会秩序の外部に排除されたものでは

14 ルイクリン「言語文化における意識」208頁。

15 ただしトルチュは、ソ連の公的言語秩序が、現実からかけ離れた論理的整合性のある世界観を提示しただけでなく、人々の生活経験レベルの認識的・倫理的判断能力を言語操作によって改竄し、人々が言語秩序と「怪物的な現実」の間のはかりしれないギャップをも受け入れ、言語秩序（党の公式イデオロギー）に馴化するよう働きかけたと論じている。Tolczyk, *See No Evil*, pp. 9-10, 29. ここでの問題は、言語秩序というものが、公式イデオロギーを直接反映したテキストに限定されていることだ。そのため、言語秩序とその外部の「怪物的な現実」という二極構造は、解消されえないものとして固定されてしまう。本稿が扱う言語秩序は、そうした狭義の公的・政治的言語と直接結びつかないような、ミクロの言語活動（例えば一見中立的な技術的・学問的言語）を含む。このミクロの言語活動において、言語的要素がどのような効力をもちえるのかを問う必要がある。

なく、収容所固有の過酷な秩序との関わりを通して見出されている。例えば囚人たちは、生き延びるために、収容所の公的秩序・規律を逸脱しつつも、それを補完する裏の規律（収容所独自のヒエラルキーや、すでに規範化した不正行為等）を身につけていく。

シューホフがブロックを積み上げて壁をつくる有名なシーンは、そうした裏の規律の対極にある行動を描いてはいるが、そこにも一つの秩序が作動するのを見てとれる。懲罰であるはずの強制労働にいつのまにか快楽を覚えはじめたシューホフは、作業終了の合図を聞いてもブロック積みをやめられない。「モルタルぺたり！ ブロックぺたり！ 押しつけて。確かめて。モルタル。ブロック。モルタル。ブロック……。Шлёп раствор! Шлёп шлакоблок! Притиснули. Проверили. Раствор. Шлакоблок. Раствор. Шлакоблок...」⁽¹⁶⁾ 一つの秩序（強制労働）が別の秩序（快楽を呼び寄せるリズム）にとってかわられるこの地点に、シューホフの「身体」の動きを見出すことができるだろう。一般社会から隔離された収容所内部に現れるこのシューホフの「身体」も、即自的・直接的に現れるというよりも、諸秩序との関わりにおいて、諸秩序の合理性のなかやあいだに不条理な形で（なぜ強制的な規律が快楽の律動に転じたかは謎である）現れ、位置づけられているようである。

この数例に見られるように、ソルジェニーツィンのテキストにおける（そして本稿が用いる概念としての）秩序は、公的なものだけでなく、ごく個人的な行動規範をも含む。そして、様々な社会活動を貫くそうした秩序の整合性が崩れるところに、「身体」が見出されるのである。

1-2. 声一聴覚とその回路

『煉獄のなかで』で中心的に扱われる「身体」が声とそれに応じる聴覚（耳）であることは先に述べたが、『収容所群島』も囚人の聴覚に言及している。そしてその聴覚も、先に挙げた「下水の流れ」やガン細胞と同様、一定の秩序との関わりの中で現れる。収容所住民の特殊な言語を解説するソルジェニーツィンは、囚人を表す з/к（зэка ゼカーと発音する）という「公式」の用語についてこう述べている。

「[...] お上のところで生まれた言葉 [зэка] は、格変化しないどころか、単数複数の区別さえありえなかった[...]。利発な住民の生きた耳はこれに我慢できず、からかわれ気味にはあるが、з/к は、群島各地各所でそれぞれ自己流の違った呼びかたに言いかえられるようになった。[...]」どのケースでも、生き返った言葉は格変化や数変化しはじめたのである（だがシャラーモフが主張するには、コリマではあくまでも「ゼカー」という言い方が保たれたという。厳寒のせいでコリマ住民の耳がこわばってしまったことは残念というほかない）⁽¹⁷⁾。

「生きた耳」は、「公式言語」を文法規則という別の言語秩序に従わせることで、「公式言語」の流通に抗する様々な方言を生む。しかし「こわばった」コリマ住民の耳は、文法規則に従いはじめた新たな方言を受けつけない。「公式言語」に逆らったのも、「生きた」言語活動を拒絶したのも、同じ「耳」である。これらの「耳」は、一定の言語的分節化（「公式

16 Солженицын А. Один день Ивана Денисовича // Соб. соч. Т. 1. М., 1999. С. 77.

17 Солженицын А. Архипелаг ГУЛАГ. 1918-1956 // Соб. соч. Т. 5. М., 2000. С. 476-477.

言語」や文法規則)に抗して現れる「身体」なのだ。ただし、この「身体」が生きているか死んでいるかは問題ではない。どちらであれ、それは何らかの形で与えられた言語秩序の「正常な」作動を阻害したり、コードを切り替えたり、あるいはそれらを無視したりする。これらは不条理な現象ではあるが、そうした不条理として現れる「身体」こそが、言語の伝達の失敗や成功を条件づけているのである。

重要なのは、聴覚が「身体」と言語という二項対立的なものを同時に担っていることだ。聴覚は、言語を分節化する機能であるとともに、「生きた」り「こわばっ」たりする「身体」(耳)として捉えられている。その聴覚に伝わる声もまた、言語と「身体」の両方を兼ね備えたものだ。声は身体において生起しながら、身体から離脱する。それによって声は他者に言語的メッセージを伝えるメディアとなるが、同時に周波数やエネルギー(声の高さや大きさ)といった物質性をもつモノ(振動する空気)でもあり、その物質的側面は、声紋のように、声が生起した身体の痕跡とみなされる。こうして二つの対立項を同時に担う声は、それゆえに、言語と「身体」の二極分化という本稿がとりあげる図式において、位置づけが困難な存在となる。本稿第3章で見ていくように、小説中で行われる音声分析とは、幾重もの手続きによってこの両義性をもった声を言語秩序のなかに位置づけ、あるいはそこから排除していく過程である。

『煉獄のなかで』は、この声の物質性・身体的側面に関して、もう一つ大きな問題を提起していると考えられる。声が言語的メッセージとして受けとめられるのは、声が滞りなく伝わった場合のことである。だがそのためには様々な条件が整っていないといけない。例えば身体を隔離された囚人の声は、外部の人間の耳には届かない。序論でも見たように、この小説は、声が言語として受け取られる以前に、声が届くかどうかという、物理的な声の伝達回路を問題にしている。

小説の中心的登場人物であるネルジンには、「奇妙な聴覚」というものが備わっており、彼は幼い頃から弾圧された者たちの「あらゆる生きた響き、うめき声、叫び声、呼び声、悲鳴」を聴き取ることができたという(286)。この聴覚が「奇妙」なのは、うめき声や叫び声が、言葉なき声＝身体的苦痛そのものとして、囚人の身体から離脱して物理的な回路を経ることなく、ネルジンに直接現前するかのようだからだ。収容所からの声や身体的苦痛という、本来は伝達不可能なものを可能にする手段として、声の伝達回路を省略する「奇妙な聴覚」が発想されているのである。ネルジンの聴覚については第4章で詳しく検討するが、この聴覚の対極物として小説中大きく取り上げられるのは、より現実的な声の伝達回路、つまり科学技術的な回路(電話網や盗聴装置)である。ネルジン(そして小説テキスト)は、「奇妙な聴覚」を持ちだすのと平行して、この電話網の技術的整備に関わる特殊収容所の位置づけや、そこで働かされる技術者の立場を問題視していく。次の第2章では、この特殊収容所という小説の舞台背景を簡単に説明し、小説で問題となる点を確認したい。

2. シャラーシカと技術エリート

『煉獄のなかで』は音声技術について語る。なぜそのような特殊で専門的な領域が取り上げられるのだろうか。一つには、この小説で語られる出来事の大部分が作者や知人の実体験

にもとづくとしてされていることがある。音声分析が行われる場所となるのは、俗に「シャラーシカ」⁽¹⁸⁾と呼ばれる特殊研究所の一つ、モスクワ北部に実在したマールフィノ研究所である（87章版では「マールフィノ研究所」となっている）。シャラーシカは、技術者パージのために仕組まれた1930年の産業党事件後に初めて創設され、国家機関との連絡がとりやすいモスクワやキエフなどの大都市郊外に点在したという。内務省・国家保安省の管轄に入ろうとした機関は、逮捕された研究者や技術者を収容し、国家利益と直接結びつく研究開発にあたらせていた。ソルジェニーツィン自身、刑期の半分（1947年7月から1950年6月まで）を開設直後のマールフィノ研究所で過ごしている⁽¹⁹⁾。

もし作家が実際にこのシャラーシカで過ごしていなければ、ここまで詳しい音声分析の話が小説化されることはなかったかもしれない。しかし小説中でこの話題は、単に体験談である以上の意義づけがなされているように思われる。

ソルジェニーツィンは、シャラーシカを「収容所群島」のヒエラルキーにおける「極楽島」と位置づけながらも、抑圧システムの強化に加担するシャラーシカの研究活動は「群島」を超える問題だと述べる。彼にとって、シャラーシカを相対化することは、「わが社会全体」そしてとりわけ「知識人階級」について反省することと同義である。「わが国のすべての教養階層は、技術者も人文学者もみな、この数十年間同じようなカシチェイの鎖の輪、一般化された特権囚ではなかったか」⁽²⁰⁾。ソルジェニーツィン自身、「核物理学者」と偽ってシャラーシカで延命しなければ『収容所群島』を書くこともできなかったのだ⁽²¹⁾。

シャラーシカの囚人は、施設の規律に従い一日の大半を知的労働に割く生活を強制され、移動の自由も剥奪された。しかしそこには、一般収容所における死と隣り合わせの過酷な肉体労働や劣悪な住環境とは無縁の「平和な日常」(36)がある。また多くの一般市民と異なり衣食住の心配から解放され、技術インテリである囚人どうしの間では外で不可能な言論の自由さえ確保される。さらに研究上の貢献や刑期満了により釈放された者の一部は、シャラーシカの職員として登用された。もちろん一般収容所においても、被収容者が監視側に転じるあるいはその逆といった流動性が見られたことは『収容所群島』でも度々指摘されている。そこでは、あらゆる場面において少しでも他人の上に立たなければ命を落とすことになる。しかしシャラーシカの場合、単に収容所内の上下関係が入れ替わるだけではない。そこでの作業は直接国家権益に結びつくものとされており、極端な場合、体制への協力は即、被収容者の釈放にもつながるし、反抗はただちに一般収容所送りを招きもする。このようにシャラーシカは、社会的立場を極めて簡単に反転させるような極端な両義性をもった場で

18 この言葉の由来は明らかではない。小説の登場人物の1人レフ・ルービンは、このシャラーシカをダンテの『神曲』における「煉獄」になぞらえる（18-19）。小説の題名となったこの言葉（первый круг）は、正確には「地獄の第一圏」と訳される。地獄の最上位の「第一圏」は、現世での罪はないがキリスト生誕以前の人間であったために地獄に送られた才人たちの居場所であり、そのため知識人を収容するシャラーシカの喩えとなっている。

19 ネルジンのモデルは作者自身である。大学で数学・物理学の学位をとったソルジェニーツィンは、マールフィノで盗聴防止装置の開発や外国語文献の翻訳・整理などに携わった。ネルジンとともに小説の主要登場人物となるルービンとソログディンにもレフ・コーベレフ、ドミトリー・パーニンというモデルがおり、2人は釈放後にそれぞれ回想録を記した。コーベレフの回想録は本稿でも参照する。

20 Солженицын. Архипелаг ГУЛАГ. Т. 5. С. 242-243.

21 Солженицын. Архипелаг ГУЛАГ // Собр. соч. Т. 4. 1999. С. 575-576.

あったといえるだろう。それゆえ『煉獄のなかで』の技術者たちはそれぞれ自らのモラルを試されることとなる。

これは、革命後、「技術エリート」と呼ばれる凝集性の高い社会層に振りあてられ、また彼ら自らが担ってきた政治的両義性とも対応している。革命後のボリシェヴィキ政権は、19世紀末からの工業化で育成された技術専門家層の有益性は認めたものの、一方では、旧体制や西側社会のイデオロギーを引き継ぎ、社会・経済問題全般に対し積極的発言力をもつ「ブルジョワ専門家」への「警戒」を呼びかけていた。この両義性は、第一次五ヶ年計画が始まる1928年前後からの技術者パージ（この時期に「技術者＝妨害分子」排斥運動のもと、技術者層の政治的位置づけが明確化する）により終止符が打たれ、その後スターリン体制下で新たに登用された若い技術者たちは、党の「総路線」に順応する教育を受け、古参技術者たちに見られた職業意識や社会問題への関心をもたなかったとされる⁽²²⁾。『煉獄のなかで』に登場する技術者の多くは旧世代に属し、新しい世代に含まれるネルジンは、シャラーシカで旧世代の批判的精神を陶冶されていく。60年代以降に活動を始める反体制知識人と高級技術官僚は、この同じ新しい技術者世代の双生児なのである⁽²³⁾。

例えば旧世代の囚人ゲラシモーヴィチは、「技術エリート」と題された章（87章版にはない）で、粛清の時代における技術者集団の使命について熱弁を振るう。

「[...]われわれ技術者や学者も逮捕され銃殺されはしたが、それでも他の人々よりは少な目だった。なぜなら、イデオロギーのほうはどんなベテン師でもやつらのためにでっちあげることができるが、物理学は自分の主人の声にしか従わないからだ。われわれは自然を研究したが、兄弟たちは社会を研究した。そういうわけでわれわれは生き残ったが、兄弟たちはいなくなったんだ。人文エリートがくじで引いて果たせなかった運命を一体誰が引き継ぐべきか——われわれじゃないか？ [...]なのにわれわれは何をやってるんだ？ こんなシャラーシカで、ジェットエンジンにロケットに秘密電話装置までやつらに献上するだなんて？ それに今度は原子爆弾か？ 自分たちさえ居心地よくておもしろければいいのか？ そんなに安く買われるようで一体われわれはエリートといえるか？」
(670)

ここでは、技術エリートという集団、ひいては技術そのものと政治体制の関係の特殊性が語られている。「自分の主人」＝「自然」にのみ従う技術は、イデオロギー（言語）の直接的介入を受けず、そこから自律したものとみなされる。だが、直接的な政治性をもたないがゆえに、技術そして技術者は逆に、体制のイデオロギー性に関わらず、それに奉仕してしまうのだ。

22 革命前から1930年までの技術者集団の社会的変遷については、中嶋毅『テクノクラートと革命権力』岩波書店、1999年を参照。古参技術者の排斥とともに新技術者層が登場する経緯については、Kendall E. Bailes, *Technology and Society under Lenin and Stalin* (Princeton: Princeton UP, 1978) が詳しい。

23 ピョートル・ワイリとアレクサンドル・ゲニス、ソルジェニーツィンが技術や技術エリートの問題を小説で扱っていることに関して、作家が文壇に登場した60年代には、それ以前に「専門家」という言葉につきまとっていた否定的ニュアンスが払拭され、プロフェッショナリズムが誠実な社会参加の方法と見なされはじめたのだと指摘し、「プロフェッショナリズムは、ソルジェニーツィンにおいて最も重要なモチーフの一つである。小説『煉獄のなかで』の技術描写は、彼の最も優れたページとなっている」と述べる。*Вайль П. и Генис А. 60-е. Мир советского человека. М., 1996. С. 248.*

ゲラシモーヴィチは、自律的な技術者集団の一員としての自負を語り、その自律性を生かし技術エリートによる地下組織を作って体制を転覆しようと思案する(742-750)(87章版にはない)。しかしネルズンは、次のようなゲラシモーヴィチの計画に疑問を抱かざるをえなくなる。「勇敢で率先的で武器を扱える者が三千から五千人いれば足りるさ。それプラス技術インテリの人間が必要だ。[…] 軍上層部と連絡をとり […] 彼らの友好的中立を取りつけるためだ。それでスターリン、モロトフ、ベリヤとあと数人だけ殺ってしまえばすむ。そこですぐにラジオでこう宣言するんだ、上層部も中間部も下層部も、すべての社会層は以前のままだと保たれると」(746)(87章版にはない)。ゲラシモーヴィチは、既存の社会機構は保ったうえで最高権力のみを退け、技術と「理性」による統治を目指すのだと言う。

技術エリートの自律性を訴えながらも、既存の社会機構と結託するゲラシモーヴィチの計画には、技術と統治機構との相互依存の関係が表れている。技術は、体制から自律した原理をもち、技術者たちの反体制的行動を可能に思わせる一方で、それ自体の非政治性ゆえに容易に体制に奉仕してしまいもある。同時に体制も技術なしでは保たれない。技術は、体制の統治機構のあり方すら部分的に決めるものだ。体制に抗したヴォロディンの声が電話技術によって伝達されるとともに捕捉されてしまうことは、こうした技術の両義性の表れであろう。声の伝達を許したり禁じたりするのは体制だとしても、そうした伝達や阻害を可能にする物理的条件を整えるのは、体制内部にありながらそこから自律した技術なのである。

『煉獄のなかで』のシャラーシカで体制転覆を企てる技術者たちは、それゆえ、体制と反体制のあいだの特異な立場に置かれている。一方で技術者集団として主体的に行動しようとする彼らは反体制的と見なされるが、他方で彼らの生み出す技術は体制の一部として機能する。彼らの声は制限される(パージやキャンペーンにより統制され、収容所に隔離される)が、同時に彼ら自身が体制内の声の伝達条件を定めているのだ²⁴。『煉獄のなかで』は、シャラーシカの技術エリートのこうした両義的な位置づけを背景にして、声の伝達の問題を提起している。

3. 音声分析

3-1. 電話の声のアイデンティティ

「電話をかけるか、かけないか？」(8)。小説冒頭のヴォロディンがこの問いを前に逡巡するのは、電話網に放たれる彼の声がどのように他者に届けられるかわからないからだ。普通、身体は人間の意志により統御され则认为られており、声も同様である。だが公衆電話をかけるヴォロディンの声は、すでに彼の制御下でない。足がつくの恐れ「英語は一言もしゃべらない」と決めたヴォロディンと、ロシア語の下手なアメリカ人武官との会話は全く要領を得ない(10-12)。ヴォロディンは最初声を変えようと努めるが、相手の無理解にいら

24 内務省、国家保安委員会、軍などは、一般電話を管理する通信省から独立した電話回線を持っていた。Robert W. Campbell, *Soviet and Post-Soviet Telecommunication* (Boulder: Westview Press, 1995), pp. 12-13. レーニンがクレムリンにソ連初の自動内線電話を導入し、スターリンが盗聴・盗聴防止システムを官僚機構に行き渡らせたことは、よく知られている。Павлов В.В. (ред.) Правительственная электро-связь в истории СССР. Ч. 1. М., 2001. この独立回線の技術整備が、保安委員会直属のシャラーシカで行われていたと考えられる。

だち、声を変えるのも忘れて叫びだす。そして相手がやっと原子爆弾の話を理解し、「どうしてあなたが本当のことを言っているのかわかるのですか […] あなたは一体誰ですか」と尋ねたとき、電話は突然切れる。盗聴のため中央電話局に待機していた保安省の職員が、回線を切断してしまったのだ。

不特定の他者に開かれた電話網によって、匿名の者でもアメリカ大使館員と話すことが可能にはなるが⁽²⁵⁾、このとき同時に声は話者のコントロールを越えたものとなる。話者の意志に反して「本当の」声が引き出されるだけでなく、その声は盗聴器で傍受・録音され、科学的検証に回されてしまう。

電話において、声は身体から切り離されて他者に引き渡され、話者に帰属しないものとなる。電話の声それ自体にアイデンティティはないというべきであろう。われわれは日常的に既知の声を聞いて直感的にそれが誰の声か把握できるが、それは聴き手が経験や状況から判断して事後的に付与するものだ。「あなたは誰ですか」という、電話ではごく普通の問いからわかるように、電話は、見知らぬ者どうしを唐突に結びつけるとき、普段自明とされている声のアイデンティティを崩してしまう(87章版では、「誰ですか」という問いにヴォロディンが答えないため、この一点で会話が堂々巡りする様子が喜劇的に描かれている⁽²⁶⁾)。しかし、こうして声がアイデンティティから切り離され、言語秩序がスムーズに作動しなくなる(話の内容の真偽も疑われる)ときにこそ、声は社会のなかでの違反的な「身体」として現れ(ヴォロディンの声が違反的なのはその会話内容のせいだが、小説では、それは電話主の身元確認に比べはるかに副次的な問題である)、捕捉され秩序に取り込まれるべきものとなる。続く音声分析は、「身体」のアイデンティティを事後的に作りだし、それを言語秩序のなかに位置づける作業にほかならない。

ヴォロディンの声の録音テープと容疑者5人の会話サンプルをもとに犯人割り出しを命じられたのは、シャーシカの音響研究室で働く言語学者ルービンだ。彼は以前から数学者ネルジンとともに、「通信技術者の最良の友」であるスターリン専用の「秘密電話装置 секретная телефония」(盗聴防止機能のついた電話)開発のため、声の暗号化と復元という課題に取り組んでいた。回線の効率的な利用のためには、声の周波数帯域を大幅にカットする必要がある。しかし聴き手は、暗号化後に復元された声から、相手が何を話しているかだけでなく、既知の声であれば相手が誰なのかを知らねばならない⁽²⁷⁾。この条件を満たす必要最小

25 1949年当時、大都市の市内電話回線の半数近くがすでに自動交換機を採用しており、公衆電話も普及していた。両者の普及は第二次大戦後の復旧とともに加速する。Псурцев Н. Д. (ред.) Развитие связи в СССР. 1917-1967. М., 1967. С. 350-351. しかし周知のようにソ連の通信技術・設備は西側諸国に比べ著しく後進的であり(ある統計によれば、1950年の電話数の人口比は、アメリカ27%、西ドイツ4.4%、日本2%に対し、ソ連は0.7%である。Elizabeth Wrenshall, "Where the World's Telephones Are," *Bell Telephone Magazine* 20:4 (1950-51), pp.258-261.)、開発よりも他国からの技術借用が目立った。また特にスターリン統治下では上意下達式の通信システムに力が注がれ(例えば有線ラジオの普及)、一般利用に関しては、伝達システムの拡大よりも統制システムの整備が促された。S. Frederick Starr, "New Communications Technologies and Civil Society," in Loren R. Graham ed., *Science and the Soviet Social Order* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1990), pp.26-30. 『煉獄のなかで』は、このようなメディア技術状況において展開する。

26 Солженицын А. В круге первом // Собр. соч. Т. 3. Frankfurt, 1969. С. 9-10.

27 こうした声の暗号化装置の開発はもちろんソ連独自のものではなく、1930年代のアメリカで、回線容量の制限を克服するために始まった。S. Millman, ed., *Communications Sciences: 1925-1980* (N.Y.: AT&T Bell Laboratories, 1984), pp. 100-101. マールフィノ研究所は、大戦中にドイツの電機メーカーから押収した

限の周波数帯域をどう設定すべきか。この難題を解く助けになるはずなのが、「音声像 звуковиды」を打ち出す「視話装置ヴィル прибор видимой речи—ВИР」だ。これは音声の周波数とエネルギーを時間軸に沿ってテープに記録する装置で、現在音声学などで使われるサウンド・スペクトログラフの原型といえるものである。研究がすでに二年を経た今、「ルービンとネルジンの机の上では、電話音声の識別だとか、はたまた何が人間の声を唯一無二のものにしているかの解明といったところまで行き着いてしまった」(32)。声の暗号化・復元と、声の主の割り出しは、声のアイデンティティとは何かという同一の問いに関わるのである。

「見てください、音声像分析からなんと多くのことが得られるか！」ルービンは熱くなって解説してみせた。「はじめ犯人が違う声で話しているのが聞こえるでしょう、彼は声を変えようとしています。でも音声像では何が変わったでしょうか？ 周波数の集中帯域が移動しただけで、個人的な話調のほうは少しも変わってません！ この話調こそがわれわれの発見の肝心なところですよ。犯人が最後まで声を変えて話したとしても、彼は自分の特性を隠せはしないでしょうよ！」(711-712)

完全に同じ声というものは二度と生まれない。だがルービンによれば、個人の声は何らかの同一性を保っており、耳で聞いても捉えられないそれが音声像からは見えてくるという。音声は、視覚的なものに変換されてはじめて客観的な分析対象となるのだ。このとき、本来聞かれるものである声は遠ざけられ、ルービンは紙に記録された音声像に集中している。必要なのは、リアルな声の再現ではなく、その紙面上の記録なのだ。ここに、「身体」(リアルな生の声)の排除という本稿冒頭で述べた問題を見てとることもできよう。しかし音声を聴いただけではアイデンティティが把握されないのと同様、一回的な音声の周波数とエネルギーを記録する音声像も、実はそのままでは意味をもたない。音声像それ自体は、一回一回の声の具体性をそのまま転写しているにすぎないのだ。そうした意味づけされない声の「身体」の記録は、どのようにしてアイデンティティを獲得するのだろうか。

3-2. 「生きた言語」をめざして ― 具体的な発音とその統計

音声のアイデンティティを求めるこの作業について、ルービンのモデルであるレフ・コーペレフは詳しい回想を記している。スターリン用の「完璧な」秘密電話装置の開発が始まったとき、コーペレフとソルジェニーツィンに対し二人の上司となった囚人技術者が言う。「あなたは人文学者ですね？ […] そしてあなたのほうは数学者？ ちょうどその両方がわれわれに必要なんです。[…] そこでまず最初に必要なのは、われわれの電話装置の素材を調査することです。その素材とは――ロシア語です。これを音声学的、そして数学的つまり統計的に調べるのです」⁽²⁸⁾。

機器や、英米の技術文献をもとに研究を進めていた。Копелев Л. Утоли моя печали. М., 1991. С. 31, 132-133; Michael Scammell, *Solzhenitsyn* (N.Y.: W.W. Norton & Company, 1984), p. 228. だが他国で同様に行われていたことであっても、声を操作するこの技術がソ連社会に固有の問題性をもちうる点にはかわりない。重要なのは、小説中でこの技術開発がどのような意義をもたされているかという点である。

28 Копелев. Утоли моя печали. С. 66. 以降、この文献からの引用は、文中で (K 頁数) と示す。

電話で聴き取られるべきなのは、人間の話す声だけだ。だから二人の研究対象は、音全般ではなく、人間の会話における音声、それもロシア語で話される音声でなければならない。コーペレフによれば、「一番難航したのは、調査過程で言葉の音声成分を具体的にどう選出すか取り決めることだった」(K68)。コーペレフとソルジェニーツィンは、「こんにちは здравствуйте」の音節は3つではなく2つだと主張する。文字上では3音節であっても、発音すると“здас-те”あるいは“дра-сте”と2音節になり、ときには“драсть”と1音節にさえる。また単語は“другого”を“другова”、“город”を“горат”といった具合に音声表記せねばならない(K68)。ここで問題になっているのは、文字と音声の対立である。“здравствуйте”の例が示すように、文字は発音に対応しない。二人の上司はこれを理解せず、「音節」や「音」と言うべきところを何度も「文字」と言い間違え、なかなか文字の呪縛から逃れられない(K69、70、89)(後述するが、この小説において文字は公的言語文化の象徴である)。だが音声調査では、通常の文字綴りを崩し厳密な「言文一致」を目指すことで、文字言語の抽象性を一回的な発話音声に近づけねばならない。

しかし、文字を発話音声に近づけるといっても、厳密な音を記録するために音声表記を細分化していくと、その表記は、特定の言語(ロシア語)において音声機能が機能する範囲を越えたものになってしまう。また同じ語句でも、その発音は話者や状況によりその都度異なり、それらの厳密な差異をすべて記述することは不可能である。音声は、一方で物理的現象として捉えられながらも、他方で特定の個別言語秩序内の単位として捉えられねばならないのだ。それゆえ、ロシア語内部の弁別特性を踏まえて、音節という、個別言語内で発音可能な最小単位が採用されることになる。言語学者と数学者が呼ばれたのは、ロシア語内部における発音上の差異を取り出すために、膨大な数の音声サンプルを収集し、周波数帯域の蓋然性を統計的に割り出す必要があるからだ。

コーペレフとソルジェニーツィンは、「言葉を形成する主要な音節のおおよその総数を確定する」(K67)ため、統計用に選んだ文字テキストから10万音節以上を音声表記に変換し(この数はソルジェニーツィンが確率論的に最低限必要と算出したサンプル数である)、シャラーシカの囚人や職員に読んでもらった。そのうち3万5千音節が音声学的に異なるものとして分類され、さらにそのなかで100以下の音節がテキスト全体の85パーセントを占めるという結果が出された(K68-69)。その後シャラーシカで開かれた学術会議でソルジェニーツィンは調査の数学的基礎づけについて語り、「それまで適用されていた調音表は、科学と生きた言語にはふさわしくない」(強調筆者)、「われわれはロシア語の言葉の「音節の本質」を初めて発見した」と力説したのである(K70-71)。

二人の調査は、音韻論と音声学の境界、さらにいえば言語的なものと物理的なものの境界に位置している。ロシア語音声の特性を捉えるために、文字に象徴される言語の抽象性・画一性は、多様な音声表記へと開かれる。そしてさらに、それぞれの音声表記が多くの被験者に実際に発音されて、具体的な音声上の差異が現れてくる。こうして言語は、声(「身体」)の具体性・多様性に寄り添うもの、すなわち「生きた言語」に変わろうとする。しかし他方で、大量に収集された個々の音声はそのまますべてが生かされるのではなく、分類されて統計データとなり、確率的に出現頻度の高い限定された数の音節のみが分析対象としての資格を得ることになる。ルービン＝コーペレフは、秘密電話装置を通過する声の聞こえ具合を

チェックするために、こうした統計をたよりに音を組み合わせせて「Вспомнил, спрыгнул, победил 思い出した、飛びおりた、勝利した」(75)といったテスト用の文をつくる。そして声の伝わり具合を聴いて、「母音は本当にすばらしい。[...]」だがスラヴ諸語にたいへん特徴的な子音の結語“ВСП”は全くだめだ」(強調筆者)などとコメントする(75)。こうして特定言語内の特定の音の組み合わせだけが無数に反復され、残りのものは切り捨てられていく。

それでもこの過程で、多様な音声は単に排除されたわけではない。一般的な言語秩序(文字言語)が個別的な音声に対して開かれ、一回的な音声は統計に取り込まれることにより、ロシア語の音声を規範化する新たな秩序が作りだされている。秩序は、文字言語の抽象性・画一性を崩すことで、音声言語の平準化・画一化を成し遂げたのだといえよう。この統計において言語秩序は、「身体」(声)を取り込むことによって、別の秩序(統計や新たな調音表)に置きかえられる。ソルジェニーツィンは「生きた言語にふさわしい」「新しく今度こそ真に科学的な調音表の作成」(K71)が必要だと主張した。しかしそうした調音表は、常に異なるものとして一回的に発音されていく本当に生きた声(「身体」)を記録するものではなく、確率的に平準化された音声言語という新たな秩序なのである。

3-3. 音声分析の技術と声のアイデンティティ

3-3-1. разборчивость と узнаваемость

研究グループは、このロシア語の基礎調査をもとに秘密電話装置の改良をはじめめる。先述したように、暗号化された声が復元されたとき、「話が理解されるだけでなく、「主人」[スターリン]が自分の話し相手を声で認知 узнать できるようにせねばならない」(69-70)。コーベレフはこれをより厳密に、「話の聴き取りやすさ разборчивость речи」と「声の認知しやすさ узнаваемость голоса」(K100)と言い表している。

上司はコーベレフに、「最初の課題は、一にも二にも聴き取りやすさです разборчивость, разборчивость, и еще раз разборчивость」(K89)と言う。「しかし」と彼は続け「第二の課題」を挙げる。「もっとひどい状態なのは、話し手が誰だかわからないことですよ неузнаваемы。聴き取りやすさ разборчивость はいいときも悪いときもあって一定しないけれども、認知しやすさ узнаваемость というかむしろ認知しにくさ неузнаваемость ですが、こっちは恒常的じゃないですか。考えてもごらん下さい、同志スターリンがコーネフ元帥だとかヴィシンスキーだとか[...]を呼びだしておいて、誰の声かわからなかったら не узнает ……」(K89-90)。узнаваемость は разборчивость に比べその精度を上げるのがより難しい。

この対比は、別の対比と重ねて考えることができる。コーベレフの表現を見ると、разборчивость は“разборчивость речи”というふうに「言葉 речь」と組み合わせられているのに対し、узнаваемость のほうは“узнаваемость голоса”や“узнавание говорящего”(K100)というように、言葉ではないものとしての「声 голос」や「話者 говорящий」と組み合わせられている。разборчивость は言語に関わる問題であり、узнаваемость は「身体」、それも声の「身体」の問題である。つまり「身体」の分節化は、言語の分節化よりも精度の高い技術を要するとみなされているのだ。

3-3-2. 音声像 — 「身体」の精査

声の認識度 *узнаваемость* について、小説の初め近くでルービンは言う。「ぼくらはかなり前進したじゃないか […] 視話装置と組み合わせればいい武器になるぞ。電話の声が一体何によってるのかももうすぐわかるはずだ……」(強調原文) (28)。 *узнаваемость*、つまり声の「身体」のアイデンティティの問題は、音声像を打ちだす視話装置によって探求されるだろう。しかし聴き取りやすさ *разборчивость* のテストの様子が何度も描かれる一方、この視話装置が主役としてようやく登場するのは、物語が中盤に入りヴォロディンの事件がシャラーシカに伝えられる「音声像」と題された章においてである。コーペレフは、実際にほとんど同じ事件が起こった時の上司の言葉を再現している。「あなたはこの推理小説的な戦闘任務を果たしながら、同時に、同じ音響学的な諸問題を全部解決しなくてはなりませんよ。問題に逆側からアプローチすることによってね」(K115)。こうして、盗聴と盗聴防止という相反する目的は、同じシャラーシカの同じ研究者のもとで、声のアイデンティティを見つけるという「同じ音響学的な諸問題」に統合されていく。声は、体制・反体制のどちらから発せられようと、常に管理統制を必要とする逸脱的な「身体」とみなされているのだ。視話装置や音声像は、そうした「身体」の管理を可能にする装置として登場する。

音声像を精査するコーペレフはまさに「身体」の緻密な観察者だ。「スペクトログラム [= 音声像]のおかげで、これまで言語学者にも音響技師にも耳鼻咽喉科医にも言語治療師にも届かなかった奥深くにまで達しうようになった」(K101)。音声像は、声の生起した身体の痕跡として、言語の粗雑さによっては捉えきれないような「身体」の具体性を保持するものとして捉えられている。「犯人が最後まで声を変えて話したとしても、彼は自分の特性を隠せはしないでしょうよ！」(712) とルービンが語っていたように、音声像は、話者の意志や意識の外部にあるものまで引き出し可視化する。

このような音声像は、ヤンポリスキーが言うような「無意識下」の「言語化されていないもの」に到達しているのだといえよう。だがこうして露わになる言語外部の「身体」は、同時に紙面に記録・保存され、「検分、測定、比較」(K100)の対象となる。ルービンと彼の上司ロイトマンも、「テープ上の兆候」を「測定器ではかり、数字の言語に翻訳しましょう」と合意する(714)。音声像は、何にも還元されえない「具体的な身体的発現」(ルイクリン)をそのまま映し出すものであると同時に、その数値化や書類上での操作を可能にする技術なのである。

3-3-3. 差異の体系のなかのアイデンティティ

音声像により声の身体的側面は可視化される。だが、声の同一性を捉えるというこの分析の目的は、音声像を測定するだけでは達成されない。同じ生体認証システムでも指紋ならば同定しやすいだろう。しかし声の場合、同じ人間でも全く同じ声を繰り返し発することはできない。声の「身体」は常に変化し続けるのであり、データのどの部分を取り出して同一性を認めるかは簡単に決められないのだ。ルービンは、故意に変えられた声も音声像を見れば同定できると主張していた(712)。しかしロイトマンは「声の可変性の限界はまだよくわかっていない」「マイクロ・イントネーションにおいてはこの限界はかなり広いかもしれない」と案ずる(712)。

声のアイデンティティを探索過程でコーペレフは、「同一の単語を同一の人間が、あるときは大きな声で、またあるときはささやき声で、あるいは質問調で、あるいは断定調で発音したとき、音声像に何らかのことが観察できた」(K111)と言う。また「様々なイントネーションで、わざと声を変えながら […] (グルジア人やユダヤ人やドイツ人やウクライナ人の) アクセントをまねて同一の単語を繰り返し発音し」音声像を比較した(K115-116)。これらの例で重要なのは、同じ単語や文が繰り返し発音されていることだ。узнаваемость は、разборчивость (声の言語的分節化) に対し、声の身体的側面の問題とされていた。しかし音声統計においても確認されたように、一回的で可変的な「身体」をもつ無数の音声は、必ず言語的に分節化された一定の単位 (音声統計では音節) にしたがって取り出されねば、互いに比較されない。個々の発音の特殊性は、特定の共約的な言語規則に準拠することによってしか認められないのである。実験室で無数に繰り出される一回的な音声は、確率的に割り出され「調音表」に固定された限定的・同一的な言語 (音節、単語、文) を読むこととしてのみ、具体的に発音 (「身体」化) されている。

コーペレフは、こうして単一の言葉を様々な調子で発音し、得られた音声像のどれにも一貫して現れるような「声の個人的特徴」を探し求めるが、結局見つけだすことができなかった(K115-116)。声には、その同一性を示すような絶対的・恒常的要素などないのだ。「何が人間の声を唯一無二のものにしているか」(32) という問いに、一つの指標をもって答えることはできない。

ではルービンやロイトマンはどのように密告者の声を割り出そうとしたのだろうか。「基調音の周波数からみて、ヴォロディンとシチェヴローノクの声が犯人の声に近く、音素 o, p, л, ш は犯人の声のものと同じようであり、個人的な話調が似ていた。これらの似たような声をもとにこれから声紋法の科学を発展させ、その手法を仕上げねばなるまい。これらの微少な差異にもとづいてのみ、将来の感度の高い装置はできあがるのだ」。二人の夢は「指紋法に似た組織体」「統一的な全ソ連共通の音声ライブラリーである。そこには一度嫌疑をかけられたことのある者全員のあらゆる犯罪的な会話が記録され照合され、悪巧みをする者は、金庫のドアに指紋を残した泥棒のように迷うことなく捕まえられるのだ」(712)。

「声の個人的特徴」は、任意の断片的な音声から捉えられるものでも、一つの恒常的な指標から見つけだされるものでもない。それは、一定の言葉を発音する様々な音声の差異のシステムの総体のなかではじめて確定され、位置づけられるものなのだ。研究グループでは、「視話装置と組み合わせる武器」として「音声分類図 классификация голосов」の作成が進んでいた(28)。密告者の声を調べるルービンも「様々な男性の声を「音素」や「基調音」ごとに分類した音声像サンプル集」(708)を手にとり、容疑者の声と比較してみる。

だがこのような体系があったとしても、声のアイデンティティを確定するためには、その都度様々な音声との比較検討が必要となる。コーペレフが密告者の声を分析したときには、協力者のソルジェニーツィンが、さらに50人の声を調べて「一致とずれの確率データを確定する」(K117)よう助言した。実際このとき、シャーラーシカの囚人や職員100人以上が「もしもし、私は〇〇ですが」などと密告者の電話会話と同じ言葉を発音し、その声が音声像に変換された。そしてこの音声像から、声の同一性 (どの音声像が同じ人物のものか) を認識できる確率が出された(K117-118)。声の身体的側面のアイデンティティは、同一人物の声

のなかに常に存在しているのではなく、同じ言葉を発する様々な声の差異の体系のなかで、その都度確率的にのみ見出されている。それは、言語外部の所与の実体（不変の要素）ではなく、ロシア語という個別言語体系のなかで作られだされていくものなのである（もしヴォロディンが大使館への電話で英語を使っていたならば、ルービンの分析システムは全く役に立たず、この探偵小説プロットも成り立たなかったことだろう）。

3-4. ヴォロディンの運命

3-4-1. 「犯罪者」を創出する「科学」

録音テープの音声像の読解から、ルービンは次のような結論を出す。「多くのとらえがたい特徴から、私は犯人がシチェヴローノクだと絶対に確信しています」（714）。ルービンは誤断してしまうのだ。しかしルービンのこの結論も、ヴォロディンのケースの直接の帰結とはならない。シャラーシカを訪れた保安省のオスコルーポフに対し、ロイトマンは、シチェヴローノクとヴォロディンの2人に容疑があると報告した。そしてルービンが、1人に絞殺できないことを言い訳しながら「さらに録音テープが必要です」（715）と申し出ると、オスコルーポフはそれを遮る。

「婆さんは豆で占ってたんだぞ！ おまえたちの「科学」などわたしに何の用がある？ わたしは犯人をとらえなきゃならないんだ。責任もって答えてくれ、犯人はここに、おまえたちの机の上 на столе にいるんだな、それは確かだな？ 自由に歩き回ったりしていないな、この5人以外は？」（715）

オスコルーポフは、これから容疑者双方を逮捕すると告げる。ルービンが「でも2人のうち1人は無実です」と叫ぶと、オスコルーポフは驚いて「無実とはどういうことだ？ […] 全くの無実だとでもいうのか？ 機関が見つけてははっきりさせてくれるさ」と言って出ていく（716）。「みんながあんなに夢中になって精巧に築き上げたものがすべて踏みにじられたようだった。声紋法などまったく必要ないようだった。もし1人ではなく2人逮捕できるのなら、なぜ念のため5人逮捕しないのか」（716）。この極めてソ連的な逮捕劇で、ルービンの「科学」は潰されたのだろうか。小説中の保安省はなぜ、厳密さを期した複雑で膨大な分析を行わせておきながら、最終的にはその成果を踏みにじるような決定をするのだろうか。

われわれはここで、なぜ小説がこのようにアイデンティティの特定が困難な声の系列（電話、音声像、声紋法等々）を主題にするのかという問題に戻ってみたい。声の身体的側面、すなわちトーンやピッチといった物質性は、その都度一回的な行為によって生み出されるものであり、全く同じものが反復されることはない。だが声は、こうした反復不可能性と共に、反復的・共約的な言語的側面（「犯罪」とみなされるメッセージ・意味）をもつ。そもそもこの言語的側面が声になれば、ヴォロディンの「犯罪」はありえなかつただろう。声は一般的に言語的意味・意図を直接的に表す媒体とされるものであり、ヴォロディンの声は「犯罪的な」意図を明白に表現し伝える。だがそうした意味の明晰さに対し、声の身体的側面は、言語的意味へ還元しきれない余剰・抵抗として現れるのだ。「身体」と言語という二つの側面は、声という同一物において短絡的に結びついているが、両者は相反し拮抗してい

るのである。

この章で見てきた音声分析は、そのような、言語的分節化に抵抗する「身体」を言語に還元していく作業であった。電話は、一回的な声の身体的側面（物質性）をも反復可能にしていく。電話の声は「オリジナル」の声ではなく、電気信号に変換後復元されたコピーであり、回線を通して遠隔地に伝達され、また盗聴される可能性をもっている。さらにその声は、録音や音声像によって反復・転写される。電話や音声像といったメディアは、声の身体的側面を反復することによって、それを言語秩序の差異体系（「音声像サンプル集」（708）「音声ライブラリー」（712）といった書類）へと確率的に組み込むものであった。

ここで行われているのは、所与のものとしての声の身体的側面のアイデンティティを発見することではなく、もともと存在しない「身体」のアイデンティティを、言語秩序のなかで新たに作り出す（選び出す）ことではないだろうか。ルービンやネルジンが「机の上で на столах」（32）声のアイデンティティを探し求めたのと同様、オスコーポフにとって「机の上に на столе」（＝書類上に）容疑者の名前があることはそれ自体、身体拘束と同等であった。保安省の暴力が加えられる個人の同一的な身体（それは「犯罪者」という同一的な意味を担うものであれば誰であれかまわない）は、書類上（＝反復可能な言語秩序）の整合性をつけようとするときに半ば恣意的（＝確率的）に選び出されるものなのである。

このように、ルービン＝コーペレフやソルジェニーツィンらがつくり出す差異の体系は、声という、言語以外にも「身体」以外にも収まりきらない現象を、最終的に書類の上で整序しようとするものだ。ルイクリンの主張のように、ソ連社会が言語と「身体」の二極構造をもっているとしても、単に言語が全面的に「身体」を抑圧しているわけではない。ソルジェニーツィンのテキストが捉える「身体」は、ヴォロディンの電話の声のように、言語的な秩序化に抵抗して（名前を告げない音声として）、言語秩序のなかに（「犯罪的な」会話として）現れる。これまでに見てきた電話、盗聴（防止）装置、ロシア語の確率統計、視話装置（音声像）、音声分類図等は、一回的で常に変わりゆく声＝「身体」（そこには恒常的なアイデンティティなど発見されない）を取り込み、そこから固定的なアイデンティティ（「犯罪者」）を作りだし秩序のなかに位置づけていく回路なのである。また逆に、「身体」が抑圧されるべきだと想定されるものであるからこそ、そのような「身体」を言語に変換するための複雑な回路が、不条理と思われるほど次々と生み出されているともいえる。言語（例えば書類）としての権力は、「身体」に直接働きかけることができない。だが声は、言語とそれに抵抗する「身体」とを同時に内包する特殊な領域である。声において、言語は幾つもの技術的装置を介して「身体」を可視的で同一性をもったものに変換していき、同時にそれを抑圧・隠蔽する（社会的異分子と同定された者を逮捕する）機会を得る。これが、音声分析の描き出す、言語と「身体」の二極分化が押し進められる過程である。したがってルービンの「科学」は「まったく必要ない」（716）ものではなかったのだ。

3-4-2. 2人の逮捕——不完全な音声分析の意味

ここまでは、保安省の決定にもかかわらず、ルービンの「科学」が「身体」を抑圧し「犯罪者」を作り出す一連の手続きとして機能していたことを論じた。しかし、その「科学」が有用なののだとしたら、保安省はなぜ、1人の「犯人」を「科学的に」突きとめさせる前に2

人とも逮捕してしまうのだろうか。その直接的原因は、容疑者を1人に絞り込めるほどの決定的な根拠が音声分析からは得られなかったからだ。そしてこの決定不可能な状況のため、ヴォロディンの声に好意を抱いたルービンは、シチェヴローノクが犯人だと誤断する(713-714)。一方コーペレフが実際に行った音声分析では、シャラーシカで新たに集められたデータの比較検討により犯人が疑う余地なく特定され、二巻の分厚い調査報告書を提出するに至ったという(K122)。もちろんこちらは小説と違い、その結論の真偽を判断することはできない。ただ、小説中の音声分析ではなぜ電話主のアイデンティティが1人に特定されなかったのか、それが何を意味しているのかについて考えてみるべきだろう。

小説中のスターリンは保安大臣アバクーモフに問い答する。「不満な者などもういない、選挙で賛成に投じる *голосуют на выборах за* 者はみな満足しているのだと言われもするが、そうなのか? [...] 政治的盲目だ! 敵は隠れたのだ、賛成に投じていながら満足していないのだ! 5パーセントか? あるいはもしかしたら8パーセントか...?」(160)。意志表明の最も公的な形式(ソ連におけるそれはまた、賛成か反対かという最も単純な言語的分節化の形態である)としての投票 *голосование* には、「隠れた」声 *голос* は現れない。選挙は書類上のものであり、そこには秩序に敵対する「身体」は現れないとみなされている。権力は、別の方法によって、公的な言語秩序の裏側に「隠れた身体」を摘発し続けねばならないのだ。声は、そのような敵対する「身体」を体現している²⁹⁾。声は言語と「身体」の二面をもっており、不満の言葉であると同時に、そのような不満を述べる身体でもある(不満が実在することを保証する)からだ。こうした「隠れた」声がある「からこそおまえ[アバクーモフ]は国家保安省で働けるのだ」(160)とスターリンは言う。不可視の場で活動する「不平分子」の身体は、保安省の存在意義を与えるために確率的につくりだされている。

これは、ルービン＝コーペレフの声紋法の精度と相関していないだろうか。「声の個人的特徴」＝アイデンティティは、声を分類した「音声像サンプル集」(708)や、シャラーシカの100人の音声との一致とずれといった差異の体系のなかに見出されようとしていた。しかしその差異の体系における同一性は、あくまでも確率的な同一性であり、そこには必ず間違える確率、言語的には差異化されえない差異(ヴォロディンとシチェヴローノクの声の「身体」の差異)が伴っている。ルービンの誤断と二人の逮捕は、こうした言語秩序には分節化できない差異の存在を象徴するものだ。保安省の暴力が最も発揮されるのは当然、言語秩序内で「正しく」分節化され特定された「犯人」が逮捕されるとき以上に、ここで描かれているように差異化されえぬ差異が残り、「犯人」と特定されえぬ者の「身体」が「不当に」拘束されるときなのである。

29) Мурашов Ю. Преступление письма и голос наказания. О медиальной репрезентации показательных процессов 1930-х годов // *Гонимый и Добренко*. (ред.) Соцреалистический канон. С. 729-739 では、ソ連社会において、このような敵対する「身体」が、声ではなく書字のほうに探し求められたことが論じられている。口頭での声は言語的意味を一義的・直接的(＝非物質的)に伝えるのに対し、書字はより間接的(＝物質的)かつ多様な解釈に開かれた媒体であるため、書き手の本当の意図・意味を隠すものだとされ、「犯罪」に結びつけられることが多かったという。ただしそこでは、本稿で扱うような声の物質性・身体的側面は考慮されていない。本稿は、声が言語的意味を明晰に伝えるものであるからこそ、その身体的側面が一層排除されるべきものとして現れてくることを論じている。

小説中のスターリンの言葉に読めるように、体制が捉えたがっているのは、言語的に分節化された身体（すでに「敵」という言語的レッテルを貼られた者）ではなく、分節化されない「身体」であり、そこから常に新たな「敵」を作りだしていかなければならない。一様に賛成票を投じる者たちのなかにこそ、この「敵」が隠れているのだ。こうして言語に変換されない「隠れた身体」を想定することは、それを言語的に同定するために様々な技術が開発されてきたことと矛盾しない。言語秩序は、「身体」を完全に分節化してしまつては、抑圧の対象を失い、「敵」を「不当に」作りだせなくなる。それは、抑圧する言語秩序の効力（「身体」の差異を無視し抑圧する力）が失われることでもある。したがって、言語的に分節化できない確率（ルービンが間違える確率）、「身体」を言語に変換し分節化する技術の不完全性にこそ、「5パーセントか […] 8パーセント」の「不平分子」の「隠れた身体」を想定させる可能性が含まれているといえるだろう³⁰。『煉獄のなかで』の電話や視話装置は、その機能の不完全性をも機能させつつ、言語秩序を整合化する過程で違反的な「身体」のアイデンティティ（「犯罪者」「不平分子」「人民の敵」等）をつくりだし、両者を二極分化していく技術として描かれているのである。

4. ネルジンの「奇妙な聴覚」

4-1. メディアの否定と「奇妙な聴覚」

電話によって、ヴォロディンは何らかのメッセージ伝達を果たしはした。しかし彼を待ち受けていたのは、ルービンの音声分析とオスコーポフの決定により二重に導き出された逮捕である。電話を通過した声は、伝えられると同時に取り押さえられるほかない。

そのようなヴォロディン・ルービンの（＝電話的）な声の伝達に対し、小説はネルジンとともに声の伝達の別の可能性を提示している。ヴォロディンの声が視話装置にかけられている最中、ネルジンは妻との面会に向かうバスの中にいる。彼はルービンと異なりこの分析に加わらなかったのだ。バスの中でネルジンは、戦線の廃墟で集め読んだ禁書の一断片を思い起こす。

それはユゴーの『九十三年』にある。ラントナックは砂丘に座っている。彼はいくつかの鐘楼を一望のもとに見ているが、これらの鐘楼の上では騒ぎがもち上がっている。全ての鐘が警鐘を鳴ら

30 スターリンが統計数字をさまざまに操作・解釈してプロパガンダに用いたことはよく知られている。社会活動に対する「下からの批判」について、次のようなスターリンの言葉を引いた以下を参照。Вайскопф М. Писатель Сталин. Заметки филолога // Понтер и Добренко. (ред.) Социалистический канон. С. 683-686. 「ときおり、批判が不完全だとして、批判者が罵られている。[…しかし、] 100パーセント正しい批判を彼らから要求するならば、下からのあらゆる批判の可能性や、あらゆる自己批判の可能性を潰してしまうことになるだろう。それゆえ私は、批判のなかに例えば5-10パーセントの真実が含まれているならば、そのような批判は、歓迎され、注意深く聴かれる […] べきだと考える。そうでなければ […] われわれは、[…] いまだ批判的作業に十分熟達していない何百、何千という人々の口を塞ぐことになるだろう。しかし、かれらの口を借りてこそ、真実自身は語るのだ」。ここでは、「批判の不完全性」、つまり言語秩序に「正しく」位置づけられない情報をともなった批判こそが、「真実」をもたらすのだと説かれている。この「下からの」声は、言語秩序に収まりきらない「不完全」なものであるがゆえに、同じく言語秩序に還元されない隠れた敵について知らせることができるという論理である。

しているのだ。だが暴風が音を運び去ってしまうので、彼に聞こえるのは——沈黙である。

これと同じように、まだ少年時代から、なにかしら奇妙な聴覚によって、ネルジンにはこの音なき警鐘が聞こえていた。それは、絶えず執拗に吹き続ける風によって人間の耳から運び去られた、死にゆく者たちのあらゆる生きた響き、うめき声、叫び声、呼び声、悲鳴であった。(286)

ネルジン（小説の作者と同じ1918年生まれ）は、「12歳にしてすでに、頭がすっぽり隠れるほど巨大な『イズヴェスチヤ』をひろげ、破壊分子－技術者の裁判速記録をこと細かに読んでいた。少年は即座に、この裁判を信じないと思った。グレーブにはなぜこれが理性では捉えられないのかわからなかったが、それでもはっきりと区別がついていた——これは全部嘘、嘘なのだと」(286-287)。また街頭から「アナウンサーの役者風の声」が聞こえるなか、街ゆく人々が「信じやすい羊たちのように群れなしていた」とき、キーロフ事件のニュースをショー・ウィンドウの新聞で読んだネルジン少年は突然「孤独に襲われた」。「キーロフを殺したのは他でもないスターリンだ」という「こんな単純なことを、大の大人の男たちは理解していなかった」(287)。

ネルジンが聴くべき声は、メディア技術（拡声器、ラジオ）を通して伝わる声ではない。またそれは、「全部が嘘」で塗り固められた新聞のような公的文書や、アナウンサーが読み上げる言葉でもない。小説では、言語、それも特に文字言語に嘘が多いことがたびたび語られる。例えば、シャラーシカの政治教育のために着任した書記は、それまでの研究所の施策が「文書として記録されていないこと」を咎め、「言葉は書類簿には綴じ込めない！」という「意味深長なことわざ」を訓辞とする（ここでの言葉とは文字に対立する口頭の言葉であり、研究所のあらゆる手続きは、発せられた途端に消えてしまう口頭の言葉では不十分で、書類として保存されねばならないということである）。他にも、監視のために囚人に書かせる秘密日誌（625）、家族宛に書かされる偽りの手紙（677）等、様々な形の文字言語が嘘を伝達するメディアとして登場する。文字は書類として保存されるため第三者に管理・操作されやすく、それゆえ真実を語ることができないものののだ⁽³¹⁾（ネルジンは、こっそり書き綴ったロシア史に関するメモをすべて焼き捨ててしまう（807））。

ヴォロディンの電話も、同様の観点から見るができる。彼の声が盗聴・録音される家庭用電話のことは、「この黒くぴかぴかのごく無害な受話器の中に〔…〕謎めいた таинственная 破壊がひそんでいるということは〔…〕誰の頭にも思い浮かばなかった」(485)と語られるが、ここでの電話は、隠れた「身体」を引き出し、それを第三者に引き渡すための「魔法の таинственный」装置である。ルービンの音声分析は、そうして捕捉された声の身体的側面をも言語的に分節化し、書類化し、保存するものだった⁽³²⁾。音声分析によって書類化された電話の声は、文字言語と同じ管理・操作を被ることになる。

31 しかし小説には、こうした保存可能な文字書類の特性を利用し欺瞞を暴く者も登場する。過去の新聞を保管しているヴォロディンの叔父は、その記事と現在の知識との食い違いから、政治指導者の無責任、約束の不履行、虚偽に満ちた発言等を確認する（503-504、506）（87章版にはない）。欺瞞的な文字は、長期間保存されることにより、言語秩序内の不整合を暴き出す手段に変わる。

32 ソルジェニーツィンの「怒りは、中継放送、ラジオ受信施設、拡声器に襲いかかる。彼の敵は声である。言葉である」という指摘を参照。Вайль и Генис. 60-е. С. 256. この場合の声とは、メディアを介して管理統制され、反復的となった声である。

これに対してネルジンが聴くべきなのは、あらゆる「理性」的なものの外部に生まれる「死にゆく者たちの生きた響き、うめき声、叫び声」である。それは、言語ではない声、そして書類上の文字や電話回線や録音テープといった物質的媒介を経ることなく直接ネルジンの内部に響く声だ。しかし他者の声を聴き取ることは本来、なんらかの距離・回路（メディア）を経由せずには不可能である。だとしたら、「沈黙」の声、「音なき警鐘」は、いかにしてネルジンに届くのだろうか。彼の「奇妙な聴覚」とは何なのだろうか。

「グレープには、青春時代を通してずっと、音なき警鐘が鳴り響いていた！——そして彼のなかで抜き差しならぬ決意が根づいたのである、知り、理解するのだ！掘り起こし、思い起こさせるのだ！」(287)。「孤独」のうちに鳴り響く「音なき警鐘」に鼓舞されたネルジンの「決意」は実行される。「ネルジンは捕らえられ、まさにあちら側へ連れ去られたのだ」(強調原文)。そして「あちら側」、つまり刑務所の側に足を踏み入れたネルジンは、推測に違わない話を実際に囚人から聴かされる(288)。だが「あちら側」に行っても、彼の「奇妙な聴覚」の由来はわからない。警鐘はネルジンの内側で最初から自律的に鳴り響いており、彼の聴覚に訴える「死にゆく人々」の苦しみは、「あちら側」で話を聴く以前からすでに推測されているからだ。

この意味でネルジンはユゴーを誤読している。『九十三年』のラントナック侯爵は、敵から身を隠しての密行中に警鐘を発見する。そして彼は確かにネルジン同様不安に陥る。だがこの漠然とした不安は、直後に侯爵が目にする貼り紙の文字によって具体化するのだ。それは、侯爵に懸賞金がかけられたことを告知する貼紙であった。警鐘は彼自身を追って鳴らされていたのである。公爵の内なる警鐘が鳴り始めるには、敵である他者の警鐘や文字を見るという迂回路（メディア）が必要なのだ⁽³³⁾。

一方ネルジンは、彼の内なる警鐘を鳴らすのが目の前の新聞や拡声器の声ではなく、その彼方（「あちら側」）にある声だと思っている。彼の内部の警鐘は、侯爵の場合と異なり、文字などの迂回路（メディア）を絶とうとする。彼が「孤独に襲われ」るのは、自分の聴覚に直接鳴り響く警鐘が人々と共有されないためである。ネルジンの聴覚が「奇妙」なのは、聴覚と声の起源の間にあるはずの距離（伝達回路）が抹消され、両者が一体化しようとするからだ。

音声分析では、分析される声の身体的側面だけでなく、分析する者の身体のありかたも問題となっている。ルービンは耳がよいという評判があるために音声分析の仕事を任されているのだが、彼は、本当は片耳が聞こえないことを隠している(73)。また、保安省の役人の前で音声像を読んでみせる（どんな言葉の音声像なのかを解読する）ルービン＝コーペレフは、間違えることを恐れ、遠くからネルジン＝ソルジェニーツィンに身振りで教えてもらおうとする(267-269)(K87)⁽³⁴⁾。音声分析とは、このような分析する側の身体を介し、分析さ

33 ヴィクトール・ユゴー著、辻稔訳『九十三年』岩波書店、1954年、上巻128-129頁。ジェフリー・メールマン著、上村忠男・山本伸一訳『革命と反復 マルクス/ユゴー/バルザック』太田出版、1996年、83-92頁は、このシーン（「耳あれど聞えず」という章）を分析し、『九十三年』が声と聴覚を特権視しながらも同時にその特権性を崩していく小説だと論じている。

34 ネルジンとルービンは、音声像に変換するテスト用の文を「音声像なら聾者も電話で話せるようになる」とあらかじめ打ち合わせていた。そしてもしこの文が使えないなら、ルービンの音声像の読みが合っているかどうか、「カードゲームのいかさま師のように」(K87) ネルジンが身振りで知らせよう打ち合わせ

れる声の「身体」を言語的意味に変換していくことである。言語的な分節化は、身体が介入しなければ行われぬのだ。このときルービンの身体は、記録や分析をする技術・機械とともに、声の伝達を条件づけるメディアとして働くといえよう。

このように、声を言語的に聴く（分節化・分析する）ことは、聴く側の外在的な身体の間接行為がなければ成り立たないはずだが、ネルジンはそれを内面化された純粋な聴覚に置き換えようとする。彼は自らの身体を抹消することで、分節化・分析を行う言語やメディア技術の間接行為を避け（それらはネルジンにとっては欺瞞的である）、嘘偽りのない他者の声（「身体」）と直接融合しようとするのだ。しかし実際には、彼の「聴覚」はあくまでも「奇妙な」もの、理念的なものにすぎない。「奇妙な聴覚」が「奇妙」でなくなるために、ネルジンは新たな行動をおこす。

4.2. 声の起源へ

ネルジンは、シャラーシカの雑用係として働く農民出身の囚人スピリドンに興味を抱き、たびたび彼のところに話を聞きに行く（ルービンらはそれを、ネルジンの「民衆のなかへの歩み」(550)と名づけた）。スピリドンが半ば文盲であるばかりか(555) 事故で盲目になってもいるため(564-565)、家族からの手紙をいつもネルジンが声に出して読んでやるというエピソード(814)は、スピリドンが文字という欺瞞的なメディアとは無縁であることを物語っている（耳がよく聞こえないが音声像を読める言語学者ルービンと対照的だ）。

ネルジンはそれまでの経験から「民衆 Народ」が「彼に対して[……]優れた点を全くもっていない」ことを理解し、こう考える。「人々が民衆へと磨かれていくのは、生まれでも、自らの手になる労働でも、教育の翼によるのでもなく、心によるのだ по душе」(553)。だから彼は、スピリドンの語る複雑な人生遍歴から何の一貫した原則も学びとれないことに落胆しない。ネルジンは「スピリドンの暖かくしゃがれた声に身をゆだね」(555) ただ聴くことしかできない。しかし、物理的な声を聞くのでも言語的意味を求めるのでもなく、ただ「スピリドンの肩に手をかけて」(568) 並び、聴く姿勢を保つことが、ネルジンのいう「心」＝聴覚なのである。このとき彼の耳元にスピリドンの口があるはずだ。ネルジンは、自分自身の身体を声の発生する場へと近づけ、自己と他者との距離を埋めることによって、他者の声の起源と一体化しようとする。

4.3. 「肉」という文字とネルジンの身体

スピリドンへの接近によって示された声の起源への回帰は、ネルジンのさらに過激な一歩によって押し進められる。彼は暗号装置の開発作業を拒否し、ラーグリーへの移送を決定されるのだ。「収容所群島」と外の世界の繋ぎ目であるシャラーシカは、秘話電話装置や視話装置など、言語秩序を支える技術を外の世界に提供し、秩序による「身体」の抑圧に加担する

ていた(267-269)。この文が示すように、アメリカでは視話装置は聾者の発音訓練のためにも使われた。また visible speech という名前は、電話の発明者ベルの父親が考案し、息子とともに聾者の発音訓練に使用した音声表記システムに由来する。Ralph K. Potter, George A. Kopp, Harriet C. Green, *Visible Speech* (N.Y.: Van Nostrand, 1947). 音声像は、声と耳（音声言語の聴取）によるやりとりが不可能な場合に、声を視覚的に伝える媒体である。それは、声と耳とのほとんど直接的なやりとりを迂回するメディアであるため、『煉獄のなかで』では、身振り（手話）とともに「いかさま」なものとして描かれている。

ことによって、自らそうした秩序の一部として機能していた。そこから出るとは、電話に象徴されるメディア回路やそれに媒介された言語秩序からの切断を意味する。ネルジンは、「第一圏」から出ることによってのみ、「警鐘」を発する「あちら側」の「身体」と完全に一体化するはずなのだ。

この決定的な下降の一步はどのように踏み出されるのだろうか。小説の末尾、ネルジンは護送車で移送されることになるが、いつからか、護送車には次のような偽装が施されるようになっていた。

護送車を食料運搬車と同じつくりにして、外側にもそっくりのオレンジと空色の縞模様を塗り、四カ国語で記すのだ。

パン Хлеб Pain Brot Bread あるいは肉 Мясо Viande Fleisch Meat と。

今、護送車に乗り込むときが来たが、ネルジンはすきをみてわきに出ると、そこから読みとった。Meat と。(823-824)

これから護送車に押し込まれるネルジンの身体は、車体の「肉 Meat」という文字によって示されることになる。偶然にはあるが、生きた人間の身体を剥きだしの「肉」の塊として扱うような暴力が、このシーンで露わになっているのだ。この「肉」という文字と身体との暴力的な指示関係は、ルイクリンの言う「テロルは身体しか知らないのだが、ことばのほうは逆に身体をまったく知らない」というソ連的表象秩序を逆説的に伝えることに成功している。「肉」という文字言語は、ネルジンら囚人の身体とは無関係な言葉として、護送車の中身を隠蔽するために書かれたものだ（「ことばは身体を知らない」）。だがそれは、車の中の身体を偶然「肉」と名指してしまうことで、身体に加えられる暴力そのものとなっている。

ここで明らかにされるのは、身体に直接加えられる物理的暴力は言語化されない（「ことばは身体を知らない」）ということではなく、言語と「身体」を特定の仕方で関係づけることによって、暴力が発生するということだ（ヴォロディンとシチェヴローノクの身体の拘束も、声の「身体」を言語秩序に取り込む過程で決定されていた）。したがってここでも、言語による「身体」の被覆によって、両者が二極化していると言っただけでは十分ではない。ネルジン（そしてわれわれ読者）がこの文字に読みとるのは、両者の関係を恣意的に取り決め、二極化する暴力的な行為なのである。このような瞬間が描かれうるのは、ネルジンが、文字を読むことのできる者（言語的な分節化をする者）であると同時に、護送車に入ることによって自分自身の身体を「あちら側」に投入し、言語秩序に排除される「あちら側」の身体＝「肉」（言語に抑圧されるもの）と化そうとしているからだ。われわれ読者は、「こちら」から「あちら」へと移動するネルジンの特殊な視点を介し、文字言語の暴力を知ることになる。

小説は、このシーンの後にさらにもう一つの展開を見せて閉じられる。護送車が発し、車中の囚人たちは収容所当局に憤り、罵声をあげる。そして車がモスクワ市街の交差点で停止したとき、車体の文字が『リベラシオン』紙の記者の目にとまる。記者はその日何度も同じような車を見たことを思い出し、メモ帳に書き留める。「モスクワ市街では、食料を積んだトラックを頻繁に見かける。大変きれいで、衛生的にも申し分ない。首都の食料供給が極

めてうまくいっていると認めざるをえない」(827)。こうして語りの視点が護送車の中(暗闇にひしめき合う囚人の身体と声の世界)から外(明るく、欺瞞的な文字がよく見える視覚的世界)へと急激に転換するとき、言語の次元が再び「身体」の現実と切り離され、「身体」を排除した自足的な言語秩序が生まれる。車内のネルジンたちの声は、ネルジン自身が「奇妙な聴覚」によって聴取すべき例の「うめき声」に呼応している。その声は、『リベラシオン』の素朴な記者が書くであろう新聞記事の背後にわれわれが聴き取らねばならない「音なき警鐘」である。

4-4. ソルジェニーツィンの語りの問題点

このように、身体を「あちら側」へ投入するネルジンの行為によって、語りは護送車の内と外の両方の視点に立ち、われわれ読者は「警鐘」を聴き取ることが可能になる。しかしこうしたソルジェニーツィンの語りの手法には、主に二面から批判が向けられてきた。一つは「こちら」と「あちら」を自由に移動する語りの遍在性に対する批判であり、もう一つは、スピリドンやイワン・デニーソヴィチに代表される「民衆」的・共同体的な(「あちら側」の)「身体」を特権化(実体化)しているという批判である。この二つの批判は一見対立しているようだが、実際は同じ問題の両面ではないだろうか。

ジェルジ・ルカーチは、ソルジェニーツィンの長編小説が官僚社会における個人の受動性を力動的に描き出していると評価しつつも、「庶民」(スピリドン)の自己完結性に感嘆するばかりで自己を見失ってしまう「変わり者」の知識人(ネルジン)が迎える結末には否定的だ。小説は「展望がないかのような見せかけにまで還元」され、「最良の人物たちの自己救出、自己保持が、抽象的な純然たる主観性の枠のなかにとじこめられたまま」³⁵⁾になる。「民衆」(「あちら側」)の世界を自己完結させ特権化しようとする、逆に、それを外側から語る知識人(「こちら側」)の世界も自己完結してしまうのだ。

ソルジェニーツィン自身は、結果として、ルカーチが指摘したように「あちら側」の世界の自己完結性を積極的に認めたのだと言えるだろう(文学においては農村派に接近し、政治においてはナショナリストとされている)。これは、第1章で検討した、「身体」を言語秩序の外部にあるものとして実体化する議論と共通する問題を持っている。抑圧された身体を解放せねばならないという主張同様、ソ連体制に虐げられてきた「民衆」を復権させねばならないといった主張だけでは、ソ連体制のもとで形成された抑圧のメカニズムを考察することはできない。

また他方で、官僚的・電話的言語秩序の外部に共同体的な領域を構成しようとする試みは、知識人の「自己保持」というもう一つの批判を招く。ソルジェニーツィンのテキストにおける語る主体の遍在性(テキストは、スターリンのグルジア訛りからスピリドンの農民風の語り口まで、あらゆる「声」を自在に操り、それらを堅牢な建築物のように整然と配置する)を、全体的な見取り図を提示しないヴァルラム・シャラーモフの短編群における不安定な語りと対比し、その「メタ的な語り」を批判することは、ソルジェニーツィンに言及する際の儀礼のようにもなっている。「メタ的な語り」は社会主義リアリズム文学に特徴的なも

35 ジェルジ・ルカーチ著、池田浩士訳『ソルジェニーツィン』紀伊國屋書店、1971年、126頁。

のであり、この点でソルジェニーツィンのテキストは、ソ連の公的文化（言語秩序により表象全般を統制しようとする文化）と通底しているという³⁶⁾。

上に見た『煉獄のなかで』の結末のシーンにおいて、テキストは確かに、文字言語の世界（欺瞞的な車体の文字や誤報をもたらすであろう新聞）と声の「身体」の世界（囚人の声と身体が封じ込められた不可視の車内）を分割しており、語る主体はこの双方に現れている。だが、最終的にこのような言語と「身体」の二極分化が描かれるとしても、これまで本稿が論じてきたのは、この小説のテキストのなかで語られる、言語と「身体」の世界の二極分化するしかたであった。音声分析とは、声の「身体」を捉えようとする体制側によって、声のアイデンティティが言語秩序内に作りだされ書類化される過程であり、ネルジンが護送車に入るシーンでは、言語による身体暴力が明らかになる。このシーンでは二つの世界が分割され、ネルジンの身体が「あちら側」に移行したとき、彼の身体は小説のテキストから消えねばならない。テキストはそれ自体が言語秩序なのであり、この小説が扱っているソ連の表象秩序においては、「身体」は最終的には言語に抑圧され、言語の外部に排除されてしまうものだからだ。だがそのネルジンの行為を通して、テキストは、「身体」と言語がいかに関係づけられるかという問題を言語秩序のなかで示すことに成功しているといえるだろう。この結末は、「あちら」（「身体」）と「こちら」（言語）が二極分化している状況だけでなく、「メタ的な語り」（言語秩序による「あちら側」の被覆）が可能になるメカニズムを語っているのである。

結論 メディアとしての作家

本稿では、電話、音声像、文字といったメディアを通して、言語と「身体」がどのように関係づけられていくかを検討してきた。序論では、言語による「身体」の抑圧というソ連文化についての議論に触れ、ソルジェニーツィンのテキストも、そうした観点から「身体」やメディア技術の問題を扱ったものとして（特に『煉獄のなかで』は声の伝達回路を問題とする小説として）読まれうることを述べた。第1章では、まず言語による「身体」の抑圧という議論の問題点を検討し、その上で『煉獄のなかで』における声の伝達というテーマを本稿がどう論じていくか示した。第2章では、シャラーシカや技術エリートの社会的位置づけが、小説中で語られる問題にとって不可欠な文脈であることを論じた。第3章では、シャラーシカで行われた音声分析の技術を検討し、「身体」のアイデンティティが言語秩序のなかでいかに構成されていくかを見た。第4章では、音声分析という形での声の聴取に対するアンチテーゼとして、ネルジンの「奇妙な聴覚」を取りあげ、その意義をソルジェニーツィンの語りに対する批判との関わりのなかで論じた。以上の議論を踏まえ、最後に、作家ソルジェニーツィンという一つの現象をどう位置づけるべきか、またそれにより彼のテキストを今後どう読むべきか、本稿において考えられる点を述べておきたい。

36 ソルジェニーツィンの作品は、「現実を美化」する「小説的な光沢」により「描かれるものについて緩和されたイメージ」を与えるという批判（*Парамонов Б. Конец стиля. М., 1999. С. 50*）、あるいはソルジェニーツィンら60年代の反全体主義的なテキストは、「インテリ」(リベラル)であれ「民衆的」(土壌主義的)であれ、同じメタ・ナラティブの形式によって語ろうとする点で、社会主義リアリズムと変わらないという見方（*Липовецкий М. Разгром музея // НЛО. 1995. №11. С. 232*）を参照。

第4章で見たように、小説の末尾で言語と「身体」が暴力的に関係づけられる瞬間、ネルジンの身体が消え去るとともに、文字の世界と声の世界との媒介を可能にする「メタ的な語り」が現れた。この語りはネルジンの「奇妙な聴覚」に似ている。ネルジンの聴覚は、「こちら側」からでも「あちら側」の声を聴取できる「奇妙」なものであった。この意味で「奇妙な聴覚」は、「こちら」と「あちら」の境界を超える「メタ的」な位置にある。この「奇妙な聴覚」＝「メタ的な語り」の位置は、実は電話的だと言えるのではないだろうか。電話が、声を話者の身体から切り離しつつ、声の「身体」を言語秩序や社会秩序のなかに取り込んでいったように、「奇妙な聴覚」は、ネルジンの身体を抹消しながらも、それによって「あちら側」の声を「こちら側」で聴取し、それを言語によりわれわれに伝えようとするものだからである。ネルジンは媒体を使わないが、彼自身が媒体となるのだ。ここでは、ネルジンがメディア技術を否定するにもかかわらず、メディア機械としての電話と人間の属性としての聴覚との差異は失われている。ルービンとネルジンが秘密電話装置の研究開発で行ったように、媒体としての電話は、声の伝達可能性を調整する装置としてある。それは、声の伝達に必要な周波数帯域を定め、その範囲のなかで言葉や声の様々な特徴を伝えることができる。ネルジンの「奇妙な聴覚」も、聴取されえないような「あちら側」の声の大きさやピッチに同調し、声を聴取しようとする「こちら側」の装置である。この聴覚装置がなければ、声は雑音か聞こえないものに留まるだろう。ネルジンは、ルービンとともに行った音声分析を最終的には放棄するが、声の分節化＝調音 артикуляция は、「生きた響き、うめき声、叫び声、呼び声、悲鳴」を聴取しようとするときにも避けて通れないものである。それをネルジンは自らの身体によって行っていたといえるだろう。

しかし、本稿で見てきたように、この小説が捉えようとしている（そして本稿が読みとろうとしてきた）のは、「生きた響き、うめき声」といった声の「身体」そのものや、それを聴取しようとする身体そのものではない。重要なのは、そのような声の「身体」という分節化不可能なものが、分節化可能なもの（言語）によって見出され定位される過程であり、またそこで発生する非合理的暴力である。ソルジェニーツィンの発言が、「民衆の声」を過度に称揚したり、自らの「メタ的な語り」に意識的でない場合があるのは確かだとしても、われわれが彼のテキストに読みとろうとしてきたのは、そうした最終的な作家の立場とは別のものである。

『煉獄のなかで』の声の「身体」をめぐる問題は、シャラーシカの技術者の特殊な立場から生まれたものであった。『収容所群島』の作者として、ソ連の悪をあますところなく書きつけたかのように受け取られるソルジェニーツィンであるが、彼の作業もこの特殊性によって可能になっている。例えば彼は『収容所群島』で1962年のノヴォチェルカスク市の暴動を記述しながら、情報伝達の問題の重要性を述べている。暴動が起こったとき市は完全に封鎖され、西側メディアだけでなくソ連国内の周辺地域にさえ情報が伝わらなかったため、暴動は闇に葬られてしまった。また市民に向けては、ラジオがこの暴動を敵の挑発だと繰り返し返したという。これを伝えるソルジェニーツィン自身も、伝え聞くことのできた事件の一部を書き記しているにすぎない³⁷⁾。

37 Солженицын. Архипелаг ГУЛАГ // Собр. соч. Т. 6. 2000. С. 543, 549. ソルジェニーツィンの前妻ナターリヤ・レシエトフスカヤは、回想録のなかで次のように述べている。『『収容所群島』の目的は、本質的に

この意味でソルジェニーツィンは、「あちら側」の他者の声の伝達を調整する技術者であり、彼の声も様々なメディアの条件に制限されている。「人文エリートがくじで引いて果たせなかった運命を引き継ぐ」という技術エリートの使命を、彼は結局「人文」的に言語を用いて果たすことになったが、その作業は、『煉獄のなかで』で描かれたメディア技術の問題と無縁ではない。小説では、「あちら」と「こちら」の接点である「第一圏」（シャラーシカ）の技術者の位置から、声を聴き取ること、声を発することの条件が問われていた。同様に作家としてのソルジェニーツィンも、「あちら」と「こちら」のあいだで声の伝達条件を調整している。このような、声を伝達するメディアとしての作家の特殊性を通してのみ、『収容所群島』も『イワン・デニーソヴィチの一日』も書かれえたのである。

は、わが国の生活を示すことではないし、ラーゲリの日常生活を示すことでもなく、ラーゲリ・フォークロアを収集することである。そのうえ、私がそれらの手記を知った時期には、活字にして公表する予定はなかったのだ。それは、かれが自分の作品中で利用しようとしていた「原料」であった」。ナターリヤ・レシェトフスカヤ著、中本信幸訳『私のソルジェニーツィン』サイマル出版会、1974年、112頁。

Voice in A. Solzhenitsyn's Novel *The First Circle*: On Language Order and the "Body"

HIRAMATSU Junna

From the period of perestroika, there has been an argument in the criticism of Soviet culture that the Stalinist culture suppressed the representation of the body, which is irreducible to the canonical language. In this body/language opposition, the body is seen as deviation, excess or something antagonistic to the social and language order. But it is not appropriate to think that the body can be represented outside of and autonomous from language because, taking this assumption and regarding the body as something that needs release from the yoke of the language order, we only repeat the same scheme of such sayings that the body must be suppressed by language. The body should, therefore, be seen as that formed in the practice of language.

In this light, dissident writer Aleksandr Solzhenitsyn's text appears to tell how the body is formed in the language activity and treated by the language order. His text does not take the body/language opposition for granted, but probes the mechanism which this opposition stands on. Solzhenitsyn's novel, *The First Circle*, describes the process of the formation of the body far more clearly and elaborately than in any other of his writings.

The central motif of the novel is voice-hearing, which inevitably raises the question of the relation of language and body. That is because, on one hand, voice carries linguistic messages, but on the other, it is a part of the human body. Voice separates from the body and goes through various media (recorder, telephone, radio etc.), but in this process it does not seem to lose the trace of the body in the form of its materiality, such as frequency and amplitude. This duality of voice plays a decisive role in *The First Circle*.

In the beginning of the story, Innokentii Volodin, a young diplomat, calls the embassy of the United States in Moscow and reveals that a Soviet agent will receive information about the manufacturing of an atomic bomb. His conversation is tapped and recorded, and the Ministry of State Security (MGB) commits the tape to a special prison-institute commonly called a *sharashka*, where confined scientists and engineers are working for the benefit of the government. Gleb Nerzhin, a mathematician, and Lev Rubin, a linguist, are ordered to analyze the tape and identify the criminal among five suspects. The novel depicts in detail the process of voice analysis, which is to be examined concretely in this paper. Previous studies on Solzhenitsyn's novels have not read these technology motifs in their literal meaning. If attention is paid to descriptions of technology, they tend to concentrate on metaphorical and ideological interpretations of them (the telephone network stands for the bureaucratic system of the socialist state, for instance) and ignore the material and practical aspect of them.

Solzhenitsyn himself lived in a *sharashka* for three years, and the model of Nerzhin is the author. He compared the *sharashka* to "the first circle" (borrowed from Dante's *The Divine Comedy*), which is the most privileged place among the concentration camps. There, prisoners were exempted from hard labor and even enjoyed freedom of speech, unthinkable in the outside society. Their work was directly connected with the benefit of the state, and significant contribution sometimes freed them. Many technical experts imprisoned in the *sharashka*, however, belonged to the generations before the Revolution, and a part of them were anti-Stalinist sympathizers. What sustained this inclination was their assurance of the autonomy of "techno-elite," but in fact their life depended on the technological innovation which they devised for the regime. In other words, the channels of their voices are strictly controlled, but at the same time their technology regulates the conditions on how voices are

transmitted. Located in this ambiguous position of *sharashka*, the prisoners in *The First Circle* are confronted with difficult ethical questions to decide one after another.

The depiction of the analysis of Volodin's voice is based on a true story Solzhenitsyn experienced in the *sharashka* and that Rubin's model Lev Kopelev wrote a detailed memoir about. By the time they take up Volodin's case, the prisoners have been engaged in the development of a scrambler phone that can protect Stalin's telephone conversation from being tapped by encoding and decoding human voices. The decoded voice must be identifiable with the speaker as well as being clearly heard. Looking back to the duality of voice mentioned above, clarity of voice (what one is saying) is related to its linguistic aspect, while identification (who is speaking) to its materiality or body. The latter is considered more complicated than the former, and what is necessary for the analysis of Volodin's voice is the latter (who is the criminal).

To develop this special apparatus, Nerzhin (Solzhenitsyn) and Rubin (Kopelev) used a device called "visible speech," the prototype of today's sound spectrograph. It gives voiceprints which records frequency and energy of voices according to time. Rubin thinks their patterns differ from person to person, so he can identify the criminal by comparing the voiceprints of given tapes. But, in fact, voiceprint does not reveal the owner of the voice by itself. It only transcribes the materiality (body) of voice, which is unique and unrepeatable every time. To identify the owner, one must find some distinct features of his voice, always unchangeable. Rubin (Kopelev) has inmates and staff in the *sharashka* read the same words and syllables in various ways, but, as he confessed, Kopelev could not discover such features. What is important here is that the identity of voice is sought by articulating its materiality (voiceprints) linguistically (by particular words and syllables).

In *The First Circle*, through voice analysis, Rubin focuses his attention on two suspects, Volodin and Shchevronok, and he tells his boss that Shchevronok is more suspicious. But that is a mistake. His boss reports to a MGB official about two suspects, requiring more data, but the official rejects the request and announces that he will arrest both. Here the strict examination of voice properties turns to absurdity. We might wonder, with all of the complicated investigation, which Rubin is forced to work on, why the author lets Rubin make a mistake and for the authorities to arrest an innocent man. Before answering this question, we should reexamine the special nature of Volodin's case — a crime on the telephone line. As it was already seen, voice has two aspects; it is regarded as a trace of the body (and this trace also has materiality) and a carrier of language simultaneously. This duality of voice makes Volodin's case very unique. On one hand, his voice transmits linguistic message, which is recognized as a crime in the social order. On the other hand, his voice is the criminal act itself. It means that the language order and the bodily act are connected directly in his voice. Usually, bodily acts, occurring in particular time and space, are unrepeatable. But Volodin's recorded voice makes it repeatable. Through the process of voice analysis, the repeatable body (materiality) of voice is articulated to the language order and identified with its owner. In this sense, the identifiable body of the criminal is formed in the practice of the language order. We may think that Rubin's mistake shows the imperfection of this articulation system: he could not tell the difference between two men's voices. This imperfection, however, is necessary to the order. Stalin in the novel suspects that 5 to 8 percent of the people in the state are not content with the present regime although they vote for it in elections. Stalin asserts that the MGB can exist only because there are always hidden enemies in the society. His suspicion keeps on creating newly imagined enemies, who do not appear in elections, that is, who are not articulated to the language order (election has the simplest linguistic form — yes or no). This supposed percentage of hidden enemies can be seen here as corresponding to the percentage Rubin mistakes. For Rubin's identification process is accompanied with the possibility of misidentification, and this misidentification (the imperfection of articulation) produces the hidden body of enemies behind the language order. Thus, the imperfection of the articulation technology makes the

language order produce suppressible body. The voice analysis depicted in the novel shows the process of how the deviant body is produced, identified and oppressed in the regulation of social and linguistic order.

Along with Rubin's voice analysis, the novel presents a different kind of voice-hearing. Nerzhin is said to have "strange hearing," with which he has been able to hear suppressed people moaning and shrieking since his childhood. This voice reaches him without going through any material medium — newspaper, radio, or telephone. He does not trust them at all. Volodin's voice is carried by the telephone line and analyzed by the device of visible speech, by which, as a result, he is arrested. Adding to such media technologies, one more medium participates in voice analysis — the body of the analyzer (Rubin); the clarity of decoded voice is examined by his ears, one of which is deaf, a fact which Rubin hides from people around him. Furthermore, when Rubin (Kopelev) has to infer from a voiceprint what the voice is saying in front of a MGB official, Nerzhin (Solzhenitsyn) secretly tries to help Rubin by showing the answer by gesture. All these mediums are described as things which deceive people. Among the mediums in the novel, written letters in documents are particularly deceptive. Recorded letters are easily placed under the control of a third party so they do not hold the truth. The cause of the deceptiveness is the materiality of media and body. Nerzhin's hearing is "strange" and fantastic because it omits such media technology and body, which seems indispensable for normal communication, and still can catch voices.

Denying all the mediums, Nerzhin tries to approach the origin of suppressed people's voice. In the *sharashka* he likes to go and listen to Spiridon, a plain peasant, because Spiridon is a blind and illiterate man that is cut from the deceptive media networks (Rubin calls this Nerzhin's "going to the people" in fun). Nerzhin cannot learn any principle of life from Spiridon's tales, but just listens to his voice through his "soul" while sitting side by side; Nerzhin's hearing is independent of reason and media.

Nerzhin goes further this way "to the people" and takes a much more radical step by refusing to take part in the work on the cryptography for the scrambler phone, as a result of which he is sent to a regular concentration camp. To leave the *sharashka*, which serves the regime with media technology, means that he will join the truly suppressed people. At the last moment in the *sharashka*, Nerzhin sees the van that will transport him and fellow prisoners elsewhere through Moscow city. He sees the word "Meat" painted on the body of the van for disguise. This detail has rich implication. The word "Meat" does not only hide the body of prisoners in the car, but exposes by accident the violence of the language order which treats the human body as "meat." In this scene, violence is not generated in the situation where language has already screened out the body as recent criticism insists, but when language designates the body in a certain way. Throwing his own body from the language order to outside of it, Nerzhin reveals such violence because in this moment he can observe both aspects of Soviet society. This is the point where the relation between language and body is determined. After that, the viewpoint of the narrative suddenly switches to a foreign newspaper reporter who sees the van on the street and takes the word "Meat" as it is. Nerzhin's body vanishes to outside of language but leaves the strange hearing to readers, who now know the violence of language.

This consequence of Solzhenitsyn's novel has been criticized in two ways; first, it distinguishes the world of suppressed ordinary people as something sacred. Secondly, it stands in an omnipotent position which commands view of both sides of Soviet society. These arguments are apparently true, but, as we have seen in this paper, *The First Circle* narrates how two aspects of society (suppressing language order and suppressed body) are being separated. In this separation consists violence, which is depicted in the last scene of the novel (the scene about the "Meat" van). In fact, Nerzhin's vanishing body acts as the medium that informs readers of the two aspects of Soviet society, though he will not admit that the human body functions as a

medium. It can be said that Solzhenitsyn himself, when he writes *The Gulag Archipelago*, for example, works as such a medium, articulating the “reality” of concentration camps to language text.